

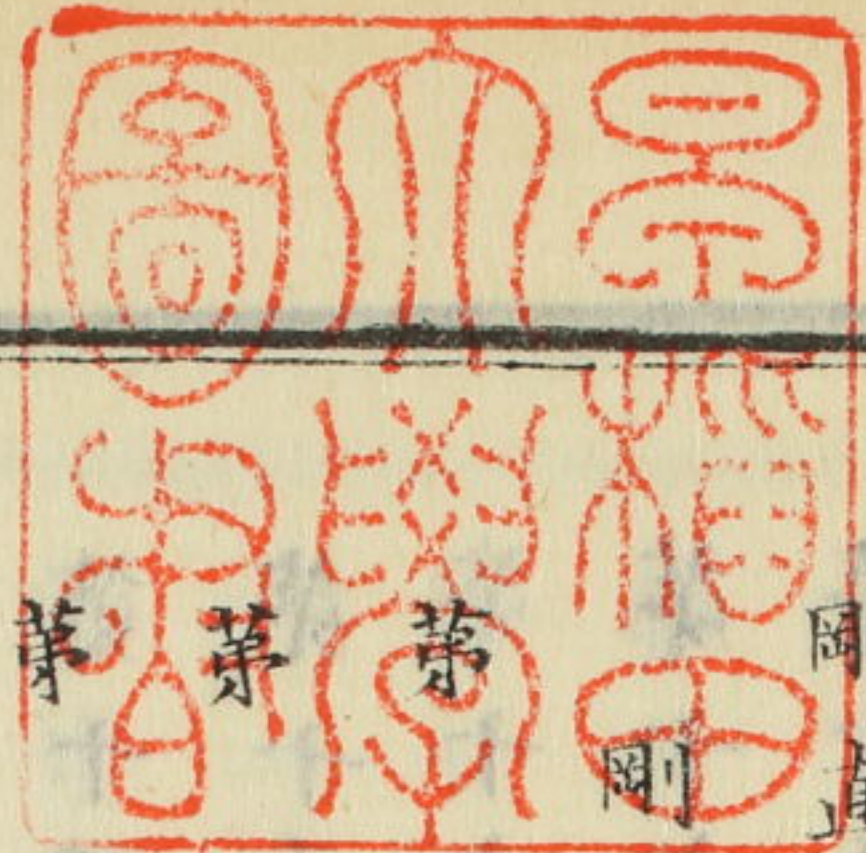
日本立志編

名脩身軌範
十河岸貫一著述

六

笛
380
6

門
號 380
卷 6



日本立志編卷六目次

剛直ノ部

剛直ノ効用ヲ論ズ

- | | | |
|----|---------------------|-----|
| 第一 | 藤原長方清盛入道ヲ諫メタル事 | 三丁 |
| 第二 | 日野資朝卓犖ニシテ膽氣アリシ事 | 五丁 |
| 第三 | 栗山利安報書ヲ改メタル事 | 六丁 |
| 第四 | 小川傳右衛門龍泉城ヲ守リタル事 | 九丁 |
| 第五 | 橋本六郎國老ヲ辱カシメタル事 | 十一丁 |
| 第六 | 芳賀内藏允柵ノ遠近ヲ度カリタル事 | 十三丁 |
| 第七 | 本多重次が剛直ナリシ事 | 十四丁 |
| 第八 | 鈴木久三郎鯉魚ヲ取り食ヒシ事 | 十六丁 |
| 第九 | 小田孫兵衛廣島城ヲ守ルノ議ヲ決シタル事 | 十八丁 |

明治三十八年九月二日
大隈信常氏寄贈

日本立志編

目次

十八丁

第十 福島丹波城ヲ守リタル事 十九丁

第十一 飯田覺兵衛長崎ヲ戍リタル事 廿四丁

第十二 佃次郎兵衛正木ノ孤城ヲ守リ援軍ヲ謝絶シタル事 廿七丁

第十三 大久保彦左衛門規諫ヲ詆譭ニ寓ゼシ事 廿九丁

第十四 里正某領主ノ言ニ服從セザリシ事 卅一丁

第十五 松平信綱幼ニシテ剛毅ナリシ事 卅二丁

第十六 耶波活所貴戚ヲシテ感悟セシメタル事 卅三丁

第十七 谷三郎右衛門嚴毅剛直ナリシ事 卅六丁

第十八 伊藤才藏紀州侯ノ前ニ於テ書ヲ講セシ事 卅九丁

第十九 林鳳岡權貴ニ屈セザリシ事 四十丁

第二十 太宰純嚴毅方正ナリシ事 卅二丁

第二十一 横須賀侯忠尚正議ヲ持シタル事 卅五丁

第二十二 小林一瓢豪壯ノ氣象アリシ事 卅七丁

第二十三 竹村悔齋才學ヲ以テ矜誇スルモノヲ面拆セタル事 卅九丁

第二十四 尼鎌倉ガ郷人ニ語リタル事 五十二丁

第二十五 小林治助剛健ニシテ屈セザリシ事 五十四丁

第二十六 石合江村流俗ニ溺レズ風習ニ牽カレザリシ事 五十七丁

第十一 飯田町長崎ノ成リタル事
 第十二 軍次郎兵衛正太ノ孤城ヲ守リ提督ヲ敵メテ
 第十三 石井源次郎ノ志ヲ成ル事
 第十四 志願會ヲ興入ニ請ル事
 第十五 板車信綱ノ志ヲ成ル事
 第十六 新井清直ノ志ヲ成ル事
 第十七 小林平三郎ノ志ヲ成ル事
 第十八 謝藤實直ノ志ヲ成ル事
 第十九 志願會ヲ興ル事

日本立志編卷六

于河岸 貫一 撰述

剛直ノ部

剛直ノ効用ヲ論ズ

剛ハ柔ノ反ナリ。直ハ曲ノ反ナリ。人ノ社會ニ立ツヤ。剛ニ
 アラズンバ。以テ各自ノ責任ニ堪ルコト能ハズ。虚偽諂曲
 ナランニハ。何ヲ以テカ信用ヲ社會ニ得ベケンヤ。古來聖
 賢ト稱シ。英傑ト呼バル。人未ダ嘗テ柔ト曲トニ由テ。大
 功偉業ヲ立タルコトヲ聞カズ。孰レモ剛毅ニシテ忠直ナ
 ル。其身命ヲモ愛マズ。所謂百折撓マズ。千挫屈セザルノ精
 神。堅忍不拔ノ志操アリシヲ以テナリ。試ミニ視ヨ。孔仲尼
 ハ。人倫ヲ説キ。修齊治國ノ道ヲ講ズ。後世聖人ト稱シ。謚シ

テ文宣王ト云フニ至ル。而シテ其為ス所ハ如何ナリシヤ。
魯ノ政ヲ攝スルニアタリ。マヅ其權臣少正卯ヲ誅ス。若シ
孔子ヲシテ其之ヲ誅スルトキハ。或ハ怨讎ノ念ヲ懷クモ
ノアリテ。已レニ不利ナラシ等ノ事ヲ懼レテ。此事ヲ斷行
スルニ猶豫セシメバ。三月ニシテ魯國大ニ治ルノ成績ヲ
見ルヲタハサルベシ。孟軻ガ仁義ヲ説キ。揚墨ニ反對スル
ヤ。嘗テ梁ノ惠王ニ謁シ。王ト初メテ語ヲ接スル。王何ゾ必
シモ利トイハント枕言シテ。少クモ假サズ。剛直ニ非ズン
バ。惡ゾ能ク如此ナルヲ得ンヤ。釋迦佛ノ印度ニ其教ヲ弘
ムルヤ。婆羅門ノ説ヲ排撃シ。古來ノ慣習ニ由テ尊崇スル
所ノ衆神ヲバ。敬禮スベキモノニ非ズトシ。刹帝利。婆羅門。
首陀。旃陀羅ノ四姓ノ區別ヲ混ジテ。平等ニ其門ニ入ルモ

ノハ釋氏ト稱セシメ。遂ニ其教ヲシテ亞細亞全洲ニ遍布
セシム。耶蘇基督ハ。羅馬ノ屬地ニ生レ。其一神教ヲ主唱ス
ルヲ以テ。遂ニ磔死ノ慘刑ニ處セラル。ニ至ルモ。敢テ其
守ル所ヲ變セズ。遂ニ歐米諸國ノ。舉テ尊崇スル所トナル。
亦以テ至大至剛ノ氣カアルニアラスンバ。一事ヲ成シ。
業ヲ立ルヲタハサルノ一班ヲ視ルベシ。若シ人ノ臣タル
モノ。其君ノ威力ノ大ナルヲ見テ。之ヲ畏怖シ。知テ而シテ
言フ能ハズンバ。是其君ニ忠アルモノニ非ルナリ。人ノ子
タルモノ。其父母ノ怒ニ觸ル。コトヲ恐レ。父ヲシテ不誼
ニ陷ルノ事ヲ為サシメ。已レ徒ニ傍觀スルハ。是其親ニ孝
ナルモノニアラサルナリ。朋友ヲ面折スルトキハ。之レガ
忿恚スル所アリ。怨憎スル所アランヲ恐レ。緘黙シテ共ニ

善ヲ責ムルコトヲ為サズンバ。是朋友ニ交リテ信アルモ
ノニ非ルナリ。忠モナク孝モナク信モナキトキハ。何ヲ以
テカ社會ニ立ツヲ得ンヤ。況ヤ一事ヲ成シ一業ヲ起スニ
於テヲヤ。而シテ其忠孝信義ヲ全フシ。直言讜論敢テ柔弱
鼻屈ヲ以テ得タリトセサルト否トハ。剛直ノ氣象ヲ有ス
ルト然ラサルトニ在リ。左レバ夫婦ノ不肖モ。柔弱ノ剛毅
ニ如カズ。讜直ノ諂曲ニ勝サルコトヲ知ル。而シテ儼然タ
ル士君子ト雖ドモ。動モスレバ事ニ臨ムデ柔弱ニ陥リ易
ク。讜直ノ人ヲ忌ミ。諂諛ノ徒ヲ愛シ。為メニ其身家ヲ危フ
スルアリ。其故何ゾヤ。柔弱ナルモノハ則チ苟且偷安ニ便
ニシテ。諂曲ナル者ハ忠良ニ似タルアルヲ以テナリ。然リ
ト雖ドモ粗豪ヲ以テ剛毅トシ。訐ヲ以テ直トナスガ如キ

ハ。固ヨリ其弊害多キモノナリ。簡擇スル所ヲ知ラス
アレベカラズ。左ニ記述スル所ハ。前代ノ賢者往時ノ名士
ノ言行ニシテ。世ノ剛直ノ氣象ヲ養成セントスル人士ガ。
熟讀玩味スルアラバ。其得喪利弊如何ヲ知ル。恰モ玻璃鏡
面ニ對シテ。其容貌ヲ照スガ如ク。自カラ心水ニ映出セン。
然バ則チ本篇ニ記スル所。人ヲシテ剛直ニシテ而シテ過
不及ナカラシムルタメニ。必シモ小補ナクンバ。アラス。為
ニ剛直ノ効用ヲ略舉シテ。卷端ニ辨スト云爾。

第一 藤原長方清盛入道ヲ諫メタル事

藤原長方ハ。權中納言顯長ノ子ナリ。官ヲ累ネテ從二位ニ
叙シ。權中納言ニ至ル。長方人トナリ。方正ニシテ。剛直事ニ
アタリ。敢言シ。忌諱スル所ナシ。初メ清盛入道ガ。都ヲ福

原ニ遷スヤ、長方悦ビズ、亦肯テ駕ニ從ハズシテ、京師ニ留
ル。人呼デ留守中納言トイフ。當時平氏ノ驕傲ナル、其都ヲ
遷ス前ニ於テ、法皇ヲ幽閉シ、關白ヲ左遷シ、暴威薰灼スル
所、百官有司ミナ口ヲ箝シ、一人ノ敢テコレヲ言ニ發スル
モノナシ。タマタ源義仲等ガ兵ヲ起スニ及ビ、長方建言
スラク、亂人ノ志ヲ得ルハ、是天意人心ノ致ス所ナリ、宜ク
太政ヲ法皇ニ復シ、關白ヲ召還スベシ。過チヲ悔、善ニ遷
ラバ、免ルハ、ニ庶幾カラント。入道嘗テ長方ノ人トナリヲ
重シズ、稍其言ヲ容ル。入道一日諸公卿ヲ會シ、新都ノ便否
ヲ問フ。諸公卿ミナ其意ヲ迎ヒテ曰ク、新都ヲ以テ便ナリ
トスト。長方獨リ平安ノ便ナルニ如カズト答フ。入道怒リ
面ニアラハル。衆相顧ミテ長方ノタメニ畏懼ス。幾クモ無

ク。入道三宮以下ヲ奉ジ、都ヲ平安ニ復ス。上下大ニ悦ブ。或
人長方ニ問テ曰ク、卿何ヲ以テカ能ク入道相國ノ旨ニ忤
フヤ。若シ一たび其怒リニ觸ル、アラバ、豈ニ殆フカラズ
ヤト。長方對テ曰ク、若シ入道ヲシテ悔心ナカラシメンニ
ハ、何ゾ新都ノ便否ヲ以テ人ニ問ハシヤ。我ハ唯入道ノタ
メニ改過ノ路ヲヒラケルノミト。長方後子ニ薙髮シテ名
ヲ中印トアラタム。月輪兼實公。常ニ長方ヲ推シテ一代ノ
巨擘ナリトス。長方建久二年ニ卒ス。年五十三ナリ。
櫻所子曰、王風式レ微ニシテ、藤氏ノ權亦衰蒞シ、武功アル
者獨リ驕傲ヲ逞フス。斯時ニアタリテヤ、笏ヲ楮ミ紳ヲ垂
レテ廟堂ニ周旋スル輩、優柔ナルコト婦女子ノ如ク。敢テ
一人ノ言ヲ發スル者ナシ。然ルニ長方ノ屹然トシテ屈セ

サルアリ。敢テ能ク言フ。其新都ノ便否ヲ問フニ及ビ。平安
便ナリトノ一語。當時ニ於テハ實ニ萬鈞ノカアルモノナ
リトス。而シテ人之ノ問フ。則チ對フルニ入道ヲシテ若シ
悔心ナカラシメバ云々ノ語ヲ以テス。其識見マタ凡常ナ
ラサルモノト謂フベシ。凡ソ人ヲ諫ムルモノ。徒ラ其旨
ニ忤ヒ。以テ自ラ直言骨髄トスルモ。其言ノ行ハレサルノ
ミナリス。身モ亦重刑ニ服スルノ不幸ニ遭際スルニ止マ
ラバ。假令諫争ニ由テ名譽ヲ得ルモ。事ニ於テ益アルコト
ナシ。諫ムヘキノ機ニ乗ジテ之ヲ諫ムルトキハ。其言ハ則
チ利益ヲ天下ニ及ボシ。其身モ亦斧鉞ノ慘刑ヲ被ラズ。
長方ノ如キ能ク諫ヲ納ル。ノ機ヲ知ル人ト謂フベキナ
リ。月輪公ノ之ヲ推シテ一代ノ巨擘トスルモノ。亦決シテ

溢美ニアラサルナリ。

第二 日野資朝卓犖ニシテ膽氣アリシ事

日野資朝ハ藤原氏權大納言俊光ノ子ナリ。官ヲ歷テ從三
位權中納言ニ至ル。其人トナリ卓犖ニシテ膽氣アリ。才識
共ニ常倫ニ超ユ。後醍醐天皇特ニ之ヲ寵遇シタマヘリ。資
朝嘗テ上直ス。時ニ南都ノ僧靜然ノ參内スルニ會ス。内大
臣藤原實衡之ヲ視テ敬ヲ起スノ色アリ。資朝其故ヲ問ハ
ハ。輒チ曰ク。其眉鬚ミナ雪ノ如クニシテ。頗ル道德堅固ナ
ルノ容貌アルヲ以テナリト。資朝哂テ曰ク。渠儂ハ老耄シ
タルノミト。資朝他日老タル狗ノ瘦羸セル者ヲ實衡ニ贈
リ曰ク。此狗亦敬スベキノ狀アリト。其豪爽ニシテ顯貴ヲ
モ憚ラサルコト如此。

資朝嘗テ盆樹ヲ愛シ。多ク條幹蟠屈セルモノヲ蒐集ス。或
時出デ、雨ニ逢ヒ東寺ノ門ニ避ケテ其晴ル、ヲ待ツ。門
ノ側ニ乞兒數人在リ。概ネ瞽者跛躄者ノ類ノミ。其醜狀陋
態見ルベカラズ。資朝因テ以為ク。我が愛スル所ノ盆樹。輒
困離奇。觀ルベキガ如クナリト雖ドモ。恰モ夫ノ乞兒輩ガ
癯殘跛躄。醜陋厭フベキモノ、如シ。平易正直ニシテ。天然
ノ性質ヲ全フスルモノニ如カサルナリト。即チ盆中ノ樹
ヲ拔除シテ盡ク之ヲ放棄ス。

櫻所子曰。資朝播紳ノ家ニ生マレ。其豪邁果決ニシテ。優柔
ノ風ヲ帶ビズ。元亨中。後醍醐帝ノ恢復ヲ圖リタマフニア
タリ。藤原俊基ト共ニ之ガ謀主トナリ。山伏ノ装ヲナシテ
關東ニ遊歷シ。以テ勤王ノ志士ヲ募ル。事遂ニ漏泄シテ。高

時ノ為メニ殺リル。然レトモ帝ノ終ニ北條高時ノ

殲滅シ。中興ノ偉業ヲ建テタマヒケルハ。資朝俊基等ガ首
唱スル所ノ功。與リテカアリト謂フベシ。左レバ初ノ内府
實衡ニ老狗ヲ贈リ。或ハ愛スル所ノ盆樹ヲ拔除スル等。顯
要ニ對シテ阿諛セズ。漫ニ世ノ好惡スル所ニ從ハズ。屹然
タル志操アルヲ見ル。宜ナルカナ。高時ガ暴威ノ下ニ屏息
スルニ忍ビズシテ。王室中興ノ謀謨ニ參シ。之ガタメニ其
身ヲ亡ボスニ至ルモ。敢テ片言隻語モ。天ヲ怨ミ人ヲ尤ム
ル所ナカリシコト。

第三 栗山利安報書ヲ改メタル事

栗山利安。四郎右衛門ト稱ス。後ヲ備後守ト改ム。黒田孝高
ニ仕フ。天正六年。荒木村重ノ伊丹城ニ據テ織田氏ニ背ク

ヤ。孝高伊丹ニ如キ。織田氏ノ為ニ村重ニ説ク。村重之ヲ獄
ニ繋グ。利安偽テ賈客トナリ。伊丹ニ赴キ。嘗テ識ル所ノ工
人ニ因リ。潛カニ城中ニ入ル。然レトモ獄ノ傍ヲ窺フ一衛
卒嚴守シ。敢テ近クベカラズ。唯獄後濠塹アリ。兵ノ守備ス
ルナシ。利安深夜洄テ獄ニ至リ。孝高ヲ見。後テ獄丁ニ賂遺
シ。屢往テ消息ヲ通ズルコトヲ得タリ。翌年ノ九月。村重其
將士ヲ留メテ城ヲ守フシメ。潛カニ尾崎ニ走ル。利安瀧川
一盜ト。伊丹ヲ攻メテ之ヲ拔ク。馳セラ獄ニ詣タリ。孝高ヲ
解ク。孝高利安カ忠藎ヲ嘉ミシ。名馬ヲ賜フ。豐太閤ノ西征
スルニ及ビ。孝高一從テ功アリ。後テ孝高ノ豐前ニ封セラ
ル。ヤ。國內叛ク者多シ。野中鎮兼ハ長巖ノ城ニ據リ。其弟
兵庫ハ雁股岳ニ據ル。其強豪制シ難シ。利安命ヲ受ケ。討テ

之ヲ夷グ。孝高賞スルニ其邑ヲ以テス。
文祿中。征韓ノ役作ル。利安孝高ノ長子長政ニ從テ先鋒ト
ナリ。金保城ヲ拔キ。其將伯子顯ヲ斬リ。進ム。其國都ニ赴
ク。韓兵蒙霧山ニ據ル。利安擊テ之ヲ走ラス。長政ノ白川ニ
屯スルヤ。利安等ヲシテ江陰城ヲ守ラシム。小西行長ノ平
壤ニ敗ル。ヤ。明兵大舉シテ江陰ヲ攻ム。時ニ城兵二千餘。
敵兵四万ト稱ス。諸將救ヒヲ請ハント欲シ。連署シテ長政
ニ報ズ。其文意ニ曰ク。明兵河ヲ渡テ來リ。饑フ。願クハ急ニ
援兵ヲ賜ヘト。利安書ヲ視テ曰ク。文不可ナル者アリト。即
チ書吏ニ命ジテ。援兵ヲ賜ヘノ一句ヲ削除セシム。而シテ
後已レガ名ヲ署シ。士卒ニ令シテ曰ク。兵寡シテ援ヒ遠シ。
吾儕唯一死アルノミ。亦耻ヲ海外ニ貽コスコトナカレト。

因テ圓陣ヲ為シテ待ツ。明軍我兵ノ寡キヲ侮トリ、四面競
ヒ進ム。利安母里太兵衛後藤基次等ト、明軍ヲ突キ殊死シ
テ戰フ。一百ニ敵セサルハナシ。明軍披靡シテ潰散ス。長政
報ヲ得テ大ニ愕キ、自ラ將トシ來リ援ク。既ニシテ江陰城
ニ到レバ、則チ明軍既ニ退ク。利安創ヲ被ムリテ米苞ニ倚
ル。長政曰ク、卿如何ゾ輕シク戰ヒヲ為スヤ。利安長政ヲ睨
ムテ曰ク、寇來ル安ゾ拒ガサルヲ得ムヤ。長政泣テ曰ク、
卿吾ガ失言ヲ悞カル。其理ナキニ非ズ。然レドモ卿等ヲシ
テ死ヲ致サシメ、吾事ニ及バズンバ、則チ吾何ノ面目アリ
テカ世ニ立タンヤ。孤軍ヲ以テ明ノ大兵ヲ破ル。卿ノ功固
ヨリ今日ヲ待テ知ルニアラズ。幸ニ今ノ言ヲ以テ意ニ介
ムコト勿レト。黑田惣右衛門ハ前キニ利安ガ報書ヲ改メ

タルコトヲ啼ミ、長政ニ謂テ曰ク、某等速カニ救ヒテ請ハ
ント欲スレドモ、報書ヲ改ハルニ由テ、遲緩シテ期ニ後ク
ル、コトヲ致セリト。利安之ヲ聞キ聲ヲ厲メシテ曰ク、報
書ヲ改メタル者ハ即チ某ナリ、惟ルニ此地白川ヲ距ルコ
トハ里大敵咫尺ニ迫ル、而シテ遠ク往返十六里ノ援軍ヲ
仰グトモ、奚ゾ能ク及バンヤ。死ハ一ノミ、坐シテ及ブコト
能ハザル。援ケヲ待タンヨリハ、寧ロ死ヲ一戰ニ決シ、黑
田氏ノ先軍寡ヲ以テ衆ニ抗シ、遂ニ力支フル能ハザルヲ
以テ將卒シテ戰死スルトキハ、我が武ヲ辱カシメズ。嗤笑
ヲ海外ニ貽サルナリ。豐太閤亦之ヲ聞カバ、必ズ喜ビタ
マハシ。某是ヲ以テ報書ノ文ヲ刪リ、以テ永訣ノ書ニ擬セ
シナリト。長政歎賞之ニ久クス。家康公ノ會津景勝ヲ討ス

ルヤ。利安ト母里太兵衛トニ命ジテ。大坂ノ第宅ヲ守ラシム。石田三成ガ諸侯ノ妻子ノ大坂ニ在ル者ヲ収メ。之ヲ城中ニ徙セシメシトスルヤ。利安太兵衛ト謀リ。長政ノ大孺人ト其夫人トヲシテ大坂ノ第ヨリ遁避セシメ。利安之ニ從ヒ。單舸ニシテ豐前ニ歸リ。孝高ニ從テ豐後ノ諸城ヲ攻ム。長政ノ筑前ニ封セラル。ヤ。利安ニ祿一萬五千石ヲ賜フトイフ。

櫻所子曰。栗山利安。其戰功ヲ立ルハ多キ。固ヨリ稱歎スルヲ待タス。而シテ援兵ヲ賜ヘノ一句ヲ剛リ。全軍ヲシテ全ク死地ニ陷ラシメ。翻テ大敵ヲシテ潰散セシムルハ。偉勲ヲ建ツ。是其兵略ニ長ズルニ由ルモ。人ナリトイヘドモ。抑モ亦國辱ヲ海外ニ貽スヲ慮カリ。敢テ身命ヲ顧慮セザル

ニ由ル。堅忍不拔ノ志操アリ。強剛不屈ノ氣象アル者ニ非ズンバ。何ゾ能ク如此ナルヲ得ムヤ。

第四 小川傳右衛門龍泉城ヲ守リタル事

小川傳右衛門ハ。黒田氏ニ仕フ。其主長政ニ從テ朝鮮ニ赴クヤ。龍泉城ヲ守ルノ命ヲ受ク。時ニ小西攝津守行長ハ。平壤ニ在リ。タマタマ明軍ノ環攻スル所トナリ。救援ヲ大友義統ニ求ム。義統ハ鳳山ヲ守リキ。而シテ此報ヲ得テ。狼狽措ク所ヲ失シ。走テ都城ニ赴ク。途ニ龍泉ヲ過グ。傳右衛門ヲ見テ語り曰ク。行長ハ明ノ大軍ノタメニ攻撃セラル。定メテ戰沒セン。明兵マサニ迫ラントス。子盍ゾ速カニ避ケザルヤト。傳右衛門義統ニ向テ曰ク。某主ノ命ニ依テ。此龍泉城ヲ守ル。敵至ラバ將サニ死カヲ竭シテ戰ヒ。力敵スベ

カラザルニ至ラバ、一死以テ主命ヲ全フルヲバザル
ノ罪ヲ謝センノミ、何ゾ敵ノ衆多ナルヲ聞キ、直ニ之ヲ
回避スベケンヤト。義統去ル。行長衆寡敵セザルヲ見、圍ヲ
衝テ出テ、大友氏ト合セントス。其鳳山ニ達スルヤ、大友氏
既ニ去ル。乃チ都城ニ走ル。明軍追躡ス。行長龍泉城頭ヲ望
ミ、遙カニ旗幟ノ翻ルヲ見、我兵猶ホ在ルヲ知り、大ニ喜ブ。
傳右衛門亦敵軍ノ至ルヲ聞キ、城樓ヨリ之ヲ俯瞰ス。明軍
行長ヲ追フ。行長且ソ戦ヒ且ソ退ク。傳右衛門輒チ其部下
ノ將ヲシテ、銃手百人ヲ率キテ赴援セシム。而シテ此兵殿
シテ追襲攻撃スル所ノ明軍ヲ拒グ。行長城ニ入り、傳右衛
門ニ謝シテ曰ク、我卿ニ賴テ復活セリ。謝スル所ヲ知ラズ
ト。傳右衛門曰ク、此城ハ險要ヲ占メ、糧食亦充足セリ。明軍

多衆ナリト雖ドモ、亦畏怖スルニ足ラズ。防禦ノ事請フ其
之ニ任ゼント。行長稱歎シテ曰ク、天下ハ剛強誰カ能ク卿
ハ右ニ出ル者アランヤト。長政傳右衛門ヲシテ、退テ栗山
利安ガ兵ト合セシム。傳右衛門即チ利安ト江陰城ヲ守リ、
我が寡ヲ以テ彼レノ衆ヲ破ブル。豐太閤此ヲ聞キ、深ク傳
右衛門ノ剛勇ナルコトヲ感賞セラレタリシトイフ。
櫻所子曰、黒田氏ハ豐公モ亦之ヲ憚ル所ナリ。其士ヲ養フ
ヤ、超群絶倫ノ人多キ亦知ルベキナリ。而シテ天正ヨリ慶
長元和ニ至ルマテ、干戈ヲ邦内ニ動カスコト多シトイヘ
ドモスベテ是内亂ノミ。夫ノ征韓ノ一役ノ如キハ、大ニ此
ニ殊ナリ。神功皇后以來、我邦ノ威武ヲ海外ニ示スノ戰ナ
リ。左レバ從軍ノ士、スベテ勇悍ニシテ、雞林八道ヲ蹂躪シ、

明ノ援軍ヲ破ル。能ク一ヲ以テ百千ニ當ルノ偉功ヲ奏ス。是ミナ醜辱ヲ海外ニ貽スヲ懼レ。死ヲ決シテ奮闘シタルニ由ルモノナリ。豐公既ニ薨ジ。我軍ヲ旋ス。後チ。明ト雖ドモ敢テ我港灣ニ來テ津ヲ問フニ至ラズ。韓人亦屏息シテ。敢テ報復ヲ圖ラザル所以ノモノ。其容易ニ抗爭スベカラザルコトヲ經驗シタルニ由レリ。然レドモ夫ノ大文義統ノ如キ。明ノ大兵ガ行長ヲ平壤ニ圍ムヲ聞キ。直チニ已レガ守ル所ヲ棄テ、去ル。然ルニ傳右衛門ハ死ヲ決シテ動カズ。勇怯相去ル。營ニ三十里五十里ナラス。黑田氏ノ將ニハ傳右衛門アリ。栗山利安ノ如キアリ。其豪勇ヨク韓兵明軍ヲシテ震懾セシムルニ足ル。而シテ之ヲ統ブルニ孝高ノ嚴毅明敏ヲ以テス。若シ時ニ乘ズレバ鹿ヲ中原ニ爭

フヲ得ヘキナリ。豐公ノ黑田氏ヲ憚カル。亦其故ナキニアラズ。今ヤ萬國交通シ。互ニ親密ノ交誼ヲ表スト雖トモ。一旦釁隙ヲ生ズル一臨メバ。忽チ堅艦利礮ヲ以テ相見ス。其形狀恰カモ春秋戰國ノ時代ノ如シ。豈ニ嘗ニ昔時ノ朝鮮支那ノミナランヤ。然バ則チ我日本國民タル者。固ヨリ外交日ニ親密ニシテ。通商往來シ。有無相通スルノ利益ヲ占得センコトヲ希望スルモノナリト雖トモ。萬一曲直ヲ兵カニ決セサルヲ得ザルノ時ニ際セバ。愛國ノ精神ヲ鼓舞シ。人々各自ニ。小川傳右衛門タリ。栗山利安タルコトヲ期シ。以テ我國ノ獨立ヲ維持シ。以テ我國ノ權理ヲ保全セズンバアルベカラズ。小川栗山ノ事ヲ以テ。後ニ昔時ノ談柄ノミトシテ。輕々ニ看過スルコト勿レ。

第五 橋本六郎國老ヲ辱カシメタル事

橋本六郎ハ、淺野家ノ歩卒ナリ。天性勇悍ニシテ銃ヲ善ク
ス。豐公ハ再ビ朝鮮ヲ伐ツニ及ビ、幸長明軍ト彦陽ニ戰フ
テ利ヲラス。猶ホ自ラ率先シ進ムデ已マズ、從士某、幸長騎
レル所ノ馬ノ轡ヲ回シ、刀鞘ヲ以テ之ヲ策ツ。馬逸シテ蔚
山ニ向フ。敵兵之ヲ追フコトマス。マス急ナリ。幸長ノ麾下
或ハ戰死シ或ハ散走シ。能ク從フモノ六郎ト。國老淺野河
内二人ノミ。六郎小狐ト名クル銃ヲ執リ、連發シテ敵ヲ防
グ。銃熱シテ手ヌベカラス。乃チ自ラ水中ニ投シ以テ其熱
ヲ殺ギ。復タ返射シテ、敵數十人ヲ殪ス。彦陽ノ蔚山ト相距
ル。僅カニ二十里。ミナ途ニシテ飢ユ。六郎搏飯三ヲ腰ニ取
リ。其一ヲ以テ幸長ニ捧ゲ、一ハ以テ自ラ食フ。其一ヲ囊ニ

収メントス。河内傍ニ在テ之ヲ乞フ。六郎睨ラムデ曰ク是
僕ガ後食ナリ。卿ハ身國老トナリ、而シテ陣ニ臨ムニ糧ヲ
裹ムノ慮リナシ。何ヲ以テカ能ク戰フコトヲ得ンヤ。今日
我軍ハ敗ル。未ダ必ズ此ニ之レ由ラズンバアラザルナ
リト。河内痛ク之ヲ恚ル。六郎ヲ得テ甘心セシト欲シ。コレ
ヲ幸長ニ請ヘドモ許サバリシトイフ。
櫻所子曰。當時戰亂相踵ギ。武士タル者。屍ヲ馬革ニ裹ムコ
トヲ知ル。固ヨリ徳川氏ノ季年。太平遊惰ノ世界ト。日ヲ同
フシテ語ルベキニアラサルナリ。而シテ河内ハ淺野家ノ
重臣トシテ。僅カニ一歩卒ノ力ニ賴リ。萬死ニ一生ヲ得。マ
タ其歩卒ニ賴テ。飢餓ヲ凌ガントス。六郎ガ之ヲ罵辱シテ。
敗走ニ至ル之ガ為ナリトイフモノ。痛快トイフベキナリ。

世ノ富貴ナル者多ク艱苦ニ耐忍スル能ハズ。戰國ノ世既ニ然リ、而シテ貧賤ナル者ハ、艱苦ヲ忍ブコトヲ能クスト雖ドモ、亦概ネ卑屈ニシテ、豪剛ノ氣力ニ乏シ。夫ノ六郎ノ如キハ、真ニ豪悍ニシテ、然カモ敢言スル者ナリ、宜ナル哉。幸長河内方請フ所ヲ許サバリシコト。

第六 芳賀内藏允柵ノ遠近ヲ度カリタル事

芳賀内藏允ハ池田輝政ニ仕フ。關原ノ役、輝政ニ從テ福島正則等ト、岐阜ノ城ヲ攻テ之ヲ拔ク。マサニ其捷ヲ江戸ニ報ゼントス。時ニ内藏允書役ヲ兼ヌルヲ以テ捷書ヲ草ス。タマタマ城中火ヲ失シ、火硝庫ニ及ブ。轟然一響、萬雷地ニ震レ、天柱折、地維摧クルガ如シ。全軍色ヲ失ス。時ニ内藏允、指鼻華ヲ揮ヒ、神色自若タリ。輝政其用ウベキヲ知リ、拔

擢シテ祿二千石ヲ賜フ。恩寵マスマス優渥ナリ。後チ大坂ノ役、輝政ノ子利隆ニ從ヒ、天滿橋ノ側ニ屯ス。利隆其先鋒ニ命ジテ竹柵ヲ設ケシム。先鋒ノ隊將某、為メニ從卒ヲ増員センコトヲ請ス。利隆輒チ内藏允ヲシテ往キ之ヲ檢セシム。内藏允騎シテ土庫ノ傍ニ至リテ之ヲ視ル。衆其新ニ擢用セラレタルヲ以テ、其勇怯ヲ試ミントスルヤ、曰ク、橋北ニ標柵アリ、請フ往テ之ヲ檢セヨト。内藏允首肯シ、乃チ馬ヲ下リ岸ニ沿テ行ク。城上ノ兵俯瞰シテ連リニ火器ヲ發ス。飛丸雨ノ如ク下ダル。内藏允動靜平常ニ殊ナラズ。徐徐其歩ヲ筭シ、以テ柵ノ遠近ヲ檢シテ還ル。衆其膽勇ニ服ス。偃武ノ後チ、伴大膳ト同ジク藩政ニ參ス。大膳ハ忠直ナリト雖ドモ、其言ヲ藩主ニ進ムル、或ハ盡サバル所アリ。内

藏允ハ則チ顔ヲ犯シテ直言諫争シ、必ズ聽納セラレテ而後チ止ム人其忠歟ヲ稱讃セリトイフ。

櫻所子曰、内藏允ノ剛強ナル、硝庫ノ破裂スルニ逢フ、以クモ驚ケル色ナシ、又銃丸雨下ノ所ニ在テ徐口ニ柵ノ遠近ヲ檢ス、尋常ノ人ノ企及スベキ所ニ非ズ、然レドモ是内藏允ノ最モ稱歎スベキ所ノモノニ非ルナリ、其最モ稱歎スベキ所ノモノハ其主ニ事フルヤ、知テ而シテ言ハザル所ナク、言フ所トシテ盡サバルコトナク、其從フコトヲ肯ンゼラレザルトキハ、直言諫争、必ズ聽納セララル、ヲ待テ而シテ後チ止ムモノ、實ニ家康公ノ所謂、先登陷陣ノ功ニ勝サルモノナリ、當時戰國ノ士、死ヲ鋒鏑ノ下ニ效スコトヲ知ルモノ多クシテ、而シテ首ヲ尊俎ノ間ニ折クコトヲ知

ル者至テ鮮シ、内藏允ノ如キ亦得カタキノ良臣ト謂フ可キナリ、而シテ輝政ノ之ヲ擢用スル、初メ報書ヲ草スルニ際シ、硝庫ノ破裂スルニ逢フテ、敢テ驚カザルノ時ニ在リ、輝政マタ人ヲ知ルノ明アリト謂フベシ。

第七 本多重次カ剛直ナリシ事

本多重次、小字ハ八藏、作左衛門ト稱ス、徳川氏ノ臣ナリ、其人トナリ剛直ニシテ、其言ヲ主ニ進ムル、廣衆ヲ避ケズ、家康公殊ニ之ヲ愛重ス、天正中、家康公疔ヲ患ヒ、群下其危篤ナルヲ憂フ、重次鑿ヲシテ之ヲ治セシメンコトヲ請フ、公可カズ、重次憤懣シテ曰ク、公ノ自ラ命脈ヲ短縮スルナラハ、某請フ先ンゼント、言畢テ趨リ出ヅ、公驚テ左右ニ命ジ、強テ伴ヒ至ラシメ、重次ニ謝シ、鑿ヲシテ診セシム、鑿曰ク、

宜ク炙スベシト。重次父ヲ灼シ湯藥ヲ進ム。其夜疔潰テ瘡
ニ。重次喜ビ極テ哭スルニ至ル。

重次ノ擢デラレテ奉行トナリ。高力天野等ト並ビニ民政
ヲ處理スルニ及ムデ諸人竊カニ以謂ラク。此一舉ハ家康
公ノ明ト雖ドモ。亦鑒ヲ失ヘリ。重次惡ゾ民牧タルニ堪ベ
キノ器ナランヤト。既ニシテ政簡ニシテ令明カナリ。府ニ
滯事無シ。國內大ニ治マル。時人之ヲ誦シ曰ク。佛高力。鬼作
左ト。重次ノ家ニ在ルマタ官ニ在ルガゴトシ。百般ノ事簡
ヲ貴ビ。煩細ヲ屑トセズ。嘗テ外ニ在リ。書ヲ其妻ニ贈テ曰
ク。一筆啓上。火ノ用慎。阿仙啼カスナ。馬肥ヤセト。阿仙ハ其
小女ノ名ナリ。

天正十八年。豐臣秀吉公。北條氏政ヲ討ム。德川氏ニ請フヲ。

沿道ノ城ヲ假ル。家康公之ヲ諾シ。諸城ヲ空フシテ待ツ。豐
公既ニ駿府ニ至ルヤ。家康公往テ之ヲ迎フ。諸將ト其次ニ
在リ。重次事ヲ以テ岡崎ヨリ往キ。家康公ニ謁スル事アリ。
後ヘヨリ罵テ曰ク。國守タル者。奚ゾ城ヲ空フシテ人ニ貸
ス。モハ。フ。ランヤ。我が主公是ノ如クナレバ。則チ人或ハ其
内室ヲ假ラントスルモ。亦之ヲ許諾スベシト。

安部川磧ニ。一大釜アリ。何人ノ造ル所ナルヲ詳カニセズ。
蓋シ古ノ刑具ナリ。家康公命シテ之ヲ濱松ニ運輸セシム。
役夫數十人。許邪シテ之ヲ運搬シ行ク。重次途ニコレニ遇
フ。問テ曰ク。是何ヲ為ス物ゾヤト。役夫等對テ曰ク。是ハ人
ヲ烹ル所ノ釜ナリ。今公命ニ由テ之ヲ濱松ニ致サントス
ト。重次此ヲ聞テ大ニ怒リ。直チニ役夫輩ヲシテ其釜ヲ擊

碎セシメ、因テ其事ヲ掌ドルモノニ謂テ曰ク、汝デ歸テ主
公、白フセ、天下ヲ治メント欲スル者ハ、刑措テ用ヒザル
ニ至ランコトヲコソ望ムベキニ、何ゾ此不祥ノ器ヲ用ウ
ルコトヲ為ンヤ、作左衛門、謹ムデ之ヲ擊碎セシムト、家康
公之ヲ聞キ、重次ヲ召シ、謝シテ曰ク、吾大ニ過テリ、漸悔ノ
至リナリト。

櫻所子曰、參河ノ君臣、天下能ク之ニ抗スルモノナク、遂ニ
志ヲ中原ニ得ルニ至レルモノ、豈偶然ナランヤ、其君其臣
共ニ當時ニ於テ相比對スベキモノナキノミナラズ、中外
ニ其例ヲ求ムルモ、マタ得易スカラザルベシ、何トナレハ
臣ニシテ能ク諫ムト雖ドモ、君ニシテ之ヲ納レザルトキ
ハ、其言遂ニ無益ニ歸ス、君ニシテ聰明ノ資アリト雖ドモ、

直言骨鯁ノ臣ナクミナ唯々諾々ノ徒ナレハ、其聰明或ハ
讒諂面諛ノ輩ノタメニ覆蔽セラレ、聰明一タビ上ニ損ス
ルトキハ、方正剛直下モニ銷滅シ、畏忌慎默ヲ以テ完全ノ
策トナシ、公議忠讜ノ路全ク壅塞ス、之ニ於テ朝ニ敢言ノ
士無ク、庭ニ執咎ノ臣ナク、國ヨリ家ニ及ブマデ、漸クニ以
テ弊ヲ成シ、父ハ其子ニ訓ヘテ曰ク、介直ニシテ以テ仇敵
ヲ招グコトナカレト、兄ハ其弟ニ誨ヘテ曰ク、方正ニシテ
以テ侮尤ヲ賈フコトナカレト、先進者ハ後進者ニ諭シテ
曰ク、剛直ニシテ以テ禍害ヲ來タスコトナカレト、此ノ如
キモノ自然ニ風ヲ成ストキハ、識者ハ腹非シテ緘黙シ、愚
者ハ唯之ニ效フコトヲ努ム、然ラバ則チ利弊得喪スベテ
之ヲ匡救スルニ由リキニ至ル、是中外ノ史冊ニ徴シテ昭

著ナルモノナリ。參河ノ武士粗豪簡率。重次ノ如キアリ。言
ヲ其主ニ進ムル。捕人廣座ノ中ヲモ避ケズ。マタ其役夫ヲ
シテ轉運セシムル所ノ物。人ヲ烹ルノ釜ナリト聞ケバ。直
チニ之ヲ破碎セシム。而シテ其主タル人。之ヲ怒ラザルノ
ミナラス。翻テ之ヲ愛重ス。徳川氏ノ當時天下ニ敵ナク。大
權遂ニ其掌握ニ歸シタル。海濱ノ者。真ニ偶然ニアラザル
ナリ。參河武士ヲ知ル人ノ言ニアラザルナリ。

第八 鈴木久三郎鯉魚ヲ取り食セシ事

鈴木久三郎ハ、參河ノ人ナリ。徳川氏ニ仕ヒ、其旗本タリ。家
康公ノ岡崎城ニ在ル。禁ヲ犯シテ捕ハル。モノ二人アリ。
其一ハ濠ニ網ミシ。其一ハ囿ニギス。罪マサニ死ニ擬セラ

レントス。久三郎之ヲ諫メント欲シテ、其機アラザルニ因
ム。乃チ自ラ令ヲ矯ハリ。池禦ノ鯉ヲ取り、烹テ之ヲ食フ。公
之ヲ聞テ大ニ怒リ。急ニ久三郎ヲ召シ、眉尖刀ヲ拔テ手ツ
カラ之ヲ斬殺セントス。久三郎袒裼シテ之ニ當リ。目ヲ瞋
ラシ高聲ニ罵テ曰ク。嗚呼。暗主ナル哉。魚鳥ノ為ヲ以テノ
故。二人ノ命ヲ奪ハント欲ス。如此ニシテ惡ンゾ能ク天下
ヲ治メンヤト。公之ヲ聞テ忽チ感悟シ。乃チ前ノ二人ヲ釋
放シ。久三郎ヲ召シテ之ヲ褒ス。公他日人ニ語テ曰ク。直言
諫争ノ功ハ一番槍ニ勝サル。其レ敵ヲ犯カスモノハ重賞
ヲ被フルコトヲ僥倖スベシ。已レガ主ヲ犯スモハ禍實
ニ測ルベカラザルヲ以テナリト。

櫻所子曰。白居易謂ルコトアリ。死馬ノ骨ヲ棄テサル者ニ

シテ。然ル後チ良驥得ベキナリ。狂夫ノ言ヲ棄テザル者ニ
シテ。然ル後チ嘉謨聞ク可キナリ。苟モ管見ノ中取ル可キ
者アラバ。俯シテ之ヲ取レ。苟クモ藹言ノ中採ルベキ者ア
ラバ。悅シテ之ヲ採レ。則チ之ヲ知ルモノハ必ズ曰ハシ。某
ガ見ノ如キタモ。猶ホ且ツ棄ラレズ。況ヤ某ガ徒ヨリモ愈
レルモノヲヤト。則チ天下情通達識ノ士。肩ヲ比ベテ至ラ
ザルヲ得ムヤ。之ヲ聞ク者ハ必ズ曰ハシ。某ガ言ノ如キ猶
ホ且ツ棄ラレズ。況ヤ某ガ徒ヨリ愈レルヲヤト。則チ天下
審謬敢言ノ士。踵ヲ接シテ來ラザルヲ得ンヤ云々。家康公
ガ直言諫争ノ功ヲ以テ。一番槍ニ勝サルト語ラレシモノ。
固ヨリ死馬ノ骨ヲ棄テスシテ良驥ヲ得。狂夫ノ言ヲ棄テ
ズシテ嘉謨ヲ聞カントスルモノナリ。然リ而シテ其旗下。

亦鈴木久二郎ノ如キ。身命ヲ顧惜セズ。直言抗争スルモノ
ヲ生ズ。是公ガ諫ニ從フコト深ル。ガ如クナル。能ク其臣
屬ヲシテ言ヲ盡サシムルニ由ルモノナリトイヘドモ。抑
亦其臣屬タル者。方正剛毅其人ニ乏シカラザルノ一班ヲ
窺フニ足レリ。

第九 小田孫兵衛廣島城ヲ守ルノ議ヲ決セシメタル
事

小田孫兵衛ハ。天性剛毅果斷ニシテ。容貌醜惡ナリ。初メ毛
利氏ニ仕フ。志ヲ得ズ去テ廣島ニ來リ。福島氏ノ士村上某
ガ家ニ客タリ。孫兵衛素ヨリ文筆ニ長ズ。某心ニ之ヲ異ナ
リトス。一日家老福島丹波ニ語テ曰ク。客小田孫兵衛ナル
者アリ。其人軀幹矮小ニシテ面貌醜陋ナリ。然レドモ筆札

ヲ善クス。之ヲ擢用セラルベシト。丹波諾シテ而シテ未ダ
果サズ。タマタマ正則ハ罪ヲ幕府ニ得テ國除セラル。ニ
會ス。幕府ハ使者來テ廣島城ヲ収メシトス。衆議紛トシテ
決セズ。孫兵衛某ニ語テ曰ク。吾前キニ脚ヲ以テ與モニ語
ル。ニ足ル者ナリトス。何ゾ今日ニ臨ムデ決斷スル。ノ遲慢
ナルヤ。思フニ今日ノ計ハ他無シ。廣島ノ臣民此城ヲ守リ、
戰ヒ利アリ。則チ其功ハ大ナル。ハミ。何ゾ紛々ノ評議ヲ
貴サシ。其孫兵衛ガ言ヲ壯ナリトシテ。之ヲ丹波ニ告グ。
丹波慨然トシテ。其言ヲ然リト。茲ニ於テ城ヲ守ル
議始メテ決ス。乃チ此事ヲ具シテ正則ニ報ズ。正則深ク
孫兵衛ガ義ヲ嘉歎シ。更ニ丹波ヲ諭シテ廣島城ヲ幕府ニ
致サシム。孫兵衛ガ廣島ヲ去ルヤ。遂ニ其終ル所ヲ知ラズ

ト云

櫻所子曰。福島氏ハ當時ノ大諸侯ナリ。而シテ其主其臣。共
ニ勇武ニ名アル。豐公ノ麾下ニ甲タリ。而シテ其國除セラ
ル。ニ及ビ。變ニ應ジテ計ヲ決スルニ臨ミ。村上某ノ食客
タル孫兵衛ガ言ニ由テ。城ヲ守ルノ議始メテ決ス。然レバ
則チ剛毅果斷。孫兵衛如キハ。福島氏ノ士ヲ養フ。驍勇ヲ以
テ稱セラル。者多キス。猶ホ且ツ之ニ凌駕ス。嗚呼亦偉
男見ナル哉。

第十 福島丹波城ヲ守リタル事

福島丹波ハ。播磨ノ人ナリ。福島正則ノ老臣トナル。天質朴
直ニシテ剛毅。正則之ヲ重ムジ。祿ニ万石ヲ給ス。關原ノ役
丹波正則ニ從フ。タマタマ浮田秀家ノ軍ヲ襲ヒ。之ヲ破ル。

浮田氏ノ敗兵。福島氏ノ陣營ヲ過グ。兵ヲシテ之ヲ追躡セシム。黒田氏ノ士後藤又兵衛之ヲ見テ曰ク。速ガニ之ヲ追ヘ必ズ獲アラント。丹波晒テ對ヘズ。既ニシテ向キニ遣ハス所ノ兵。首級ヲ獲テ歸ル。又兵衛其敏捷ナルヲ歎ズ。然ルニ人此事ヲ謬リ傳ヘテ。丹波ノ功ヲ成スハ。又兵衛ノ教フル所ナリトス。丹波之ヲ聞テ。豫バズ。以テ又兵衛ノ誇言スル所ナリトス。後テ又兵衛ガ黒田氏ヲ去リ。マサニ京師ニ赴カントスルヤ。途ニ藝洲ヲ過グ。正則之ヲ用ントス。丹波ヲシテ又兵衛ニ其事ヲ言ハシム。又兵衛曰ク。必ズ三萬石ナラバ。則チ敢テ質ヲ委セント。正則之ヲ聞キ。頭ヲ掉テ曰ク。功勞汝ガ如キ。猶ホ二萬石ナリ。況ヤ又兵衛ニ於テチャト。丹波之ヲ驚テ曰ク。我主公又兵衛ノ言フ所ノ如クセバ。其亦依テ以テ名ヲ成サズ。何トナレバ。三萬石ヲ以テ又兵衛ヲ召ス。世人マサニ謂ハントス。丹波他ニ仕フルトキハ。必ズ四萬石ヲ得ベシ。又兵衛不ラ此ノ如クカレバナリト。某ガ二萬石ニ安ムスルハ。則チ某ガ榮ナリ。又兵衛ノ榮ハ。ミニアラザルナリト。正則遂ニ聽カズ。

丹波容貌醜陋ニシテ跛ナリ。關原大捷ノ後。徳川家康公。諸侯ノ家臣ニシテ戰功アル者ヲ召シテ。盃ヲ賜フ。丹波其同僚尾關石見。長尾隼人ト同クコレニ與カル。而シテ石見ハ瞎。隼人ハ缺唇ナリ。左右ミナ口ヲ掩フテ笑ス。既ニ退ク。公左右ヲ叱テ曰ク。彼輩ハミナ攻城野戰ハ功ヲ積ミ。名譽世ニ著ハル。者ナリ。武勇拔群ハ輩ト謂フベシ。汝等何為ス者ズ。安ゾ三士ハ容貌ハ醜キヲ以テ之ヲ嗤フコト得ンヤ。

ト。左右ミナ醜然タリ。

元和鞆索ノ後、幾クモ無ク。正則江戸ニ在リ。罪ヲ幕府ニ得
テ國除シ。流刑ニ處セラル。時ニ丹波ハ廣島城ニ留守タリ。
大崎玄蕃ハ鞆城ヲ守ル。徳川秀忠公、永井直勝、松平忠良ヲ
遣ハシテ、廣島及ビ鞆ノ二城ヲ収メシメ、而シテ近國ノ諸
侯ニ命ジ戒嚴セシム。永井松平ノ二人兵若干ヲ率ヰテ廣
島ニ到リ、教命ヲ丹波ニ傳ス。丹波自若トシテ、曰ク、後チマ
サニ自ラ往テ奉答スベシト。直チニ藝州一國ニ令シテ曰
ク、國主罪ヲ得テ故タレ。使者數人來テ城ヲ収ム。然レドモ
國主ノ生死未ダ知ルベカラズ、宜ク急ニ來テ城ヲ守ルベ
シ。若シ申牌ヲ過ギテ來ラザルモノハ、之ヲ不義ノ徒ト為
シテ籍ヲ除クベシト。閩藩ノ士之ヲ聞キ、各競テ城ニ入リ。

守備略整頓ス。丹波人ヲシテ使者ニ言ハシメテ曰、謹
教命ヲ奉ズ。寡君流竄セラレ、廣島鞆ノ兩城ヲ沒収セラル。
然リ而シテ未タ寡君ノ存亡如何ヲ審カニセズ、ソモソモ
此兩城ハ關原ノ戰功ヲ以テコレヲ寡君ニ賜フ所ナリ。寡
君某等ニ命ジテ曰ク、今兩城ヲ以テ汝等ニ托ス。汝等能ク
之ヲ守レ、緩急ニ際セバ城ニ據テ死守セヨト。某等此言ヲ
服膺シテ、夙夜懈ラズ。竟ノ犬ハ竟ノ為ニスルヲ知ル。亦舜
アルヲ知ラザルナリ。縱使教命アリト雖ドモ、敢テ從フコ
ト能ハズ。寡君ガ兩城ヲ致セトイハバ、則チ之ヲ致スベキ
ハミト。使者曰ク、不日正則ノ手書ヲ取テ之ヲ示サント。丹
波、夕使ヲシテ言ハシメテ曰ク、寡君ハ手書ヲ示シ、而シ
テ後チ城ヲ収メントナラバ、其書ノ未ダ至ラザル間ハ、請

兵ヲ境外ニ移サレヨト。使者之ヲ許肯シ。為メニ兵ヲ退
クルコト數里。此ヨリ前キ林龜之丞ナル者アリ。諸士城ニ
入ルノ日。タマタマ遠ク出デ、漁ス。其奴馳テ至リ。告グル
ニ丹波ノ令ヲ以テス。龜之丞大ニ驚キ歸レバ。則チ城門既
ニ閉ヂタリ。數門者ニ乞ヘドモ。入ルコトヲ允サズ。乃チ大
呼シテ曰ク。我今日故アリ。遠ク出デ、期ニ後ル。然レドモ
勇士ハ名コソ惜シケレ。豈ニ碌々トシテ生ヲ偷マンヤト。
遂ニ自殺ス。門者驚テ之ヲ救ハントスレバ。已ニ絶タリ。丹
波亦コレヲ歎惜ス。正則ノ手書既ニ至ル。丹波薰沐シテ之
ヲ讀ミ。而シテ使者ニ謂テ曰ク。當サニ速ニ城ヲ致スベシ。
然レドモ寡君ノ夫人及ビ諸士ノ妻孥アリ。徒行シテ去ル
ベカラズ。望ムラクハ船五百隻ヲ給セヨ。若シ給セラレバ

ニハ先ヅ妻孥ヲ殺シ。而シテ後チニ自殺セシト。使者乃チ
五百隻ノ船ヲ給ス。丹波正則ノ夫人及ビ諸士ノ妻子ト其
什器等ヲ船ニ搭載シ。諸士ハ義ヲ守ル者。遁逃セル者。其氏
名ヲ迎賓館ハ壁ニ題シ。兵仗ハ府庫ニ在ルモ。ハ之ヲ簿
冊ニ記シ。監守ハ兵ヲ留メ。而シテ後チ徐口ニ城ヲ出デ、
去ル。後チ其終ル所ヲ知ラズト云。

櫻所子曰。丹波ノ廣島城ニ留守タル能ク其職ヲ盡クスモ
ノト謂フベキナリ。正則既ニ流刑ニ處セラレ。藝州關國ノ
士。身ヲ措クニ所ナシ。而シテ幕府ノ使者。兵ヲ率テ來テ其
城ヲ收メ。且ツ近國ノ諸侯各戒嚴スル所アリ。假令福島氏
ハ士ヲ養フ。勇悍其人ニ乏シカラズト雖ドモ。事既ニ茲ニ
至ル。士氣沮喪シテ。亦用クベカラサルハ。理勢ノ宜ク然ル

ベキ所ナリ。然ルニ丹波屹然トシテ動カズ。此非常ノ變ニ
遭際シテ。毫モ措ク所ヲ失スルノ態ナキノミナラズ。斷然
城ヲ守ルノ策ヲ決シ。而シテ使者ニ對フルニ。正則ノ手書
ヲ得ルニアラズンバ。教命アリト雖ドモ。敢テ從フコト能
ハサルノ理由ヲ以テス。而シテ其率ル所ノ兵ヲ境外ニ退
カシメ。正則ノ手書ヲ得テ。猶ホ船ヲ給センコトヲ請ヒ。然
ル後々徐ロニ城ヲ出ヅ。其能ク義ヲ執リ職ヲ守ルモノ。固
ヨリ節義ヲ重ンズルニ由ルモノナリト雖ドモ。亦變ニ臨
ミ機ニ應ズルノ膽略アルニ非ズンバ。惡ゾ賤遷添離ノ間
ニ當テ。能ク如斯ナルヲ得ムヤ。其變ニ臨ムデ倉皇狼狽セ
ザル所以ノ者。剛毅ノ氣象アル者ニアラズンバ。能ハサル
ナリ。而シテ其剛毅ノ氣象ナル者ハ萬止ム能ハサル時期

ニ遭際セバ。敢テ身命ヲモ愛惜セザルニアラズンバ。能ハ
ザル所ナリ。歐人ノ言ニ曰ク。生ヲ愛ミ活ヲ求ムルニ汲々
トシテ義ト名トヲ顧ミザルモノヲ目シテ。卑怯者トスル
所ノ意見ハ。社會一般ノ福祉ヲ保維スルガタメニ要用ナ
ルト否ザルトハ。疑ヒヲ容ル。ニ足ラザルモノナリ。其然
ル所以ハ何ゾヤ。人ノ此世ニ在ル。最モ愛重スル所ノ者ハ。
身命是ナリ。勇氣也者ハ。義ト名トヲ顧ルニ由テ生ズルモ
ノタリ。一時忿々ニ堪ズシテ激爭スルモノハ。憤怒ヨリ發
スルモノナリトイヘドモ。沈勇也者ハ。名譽ヲ貴ブニ生ズ
ル所ノ氣象ナリ。身命ヲ愛ム者ヲ視テ。怯懦ナリ卑劣ナリ
トシテ。之ヲ輕侮スルノ意見ハ。社會ニ効能ナキ者ニ非ズ。
怯懦ニシテ身命ヲ惜ムモノ。世人ニ毀譽セラルノ苦

ハ、無益ノ苦ニアラズ。何トナレバ一國ノ安寧ヲ保維スル
ハ、其社會ニ在ル人ノ勇氣ニ依リ、外寇ヲ捍禦シテ、其侮リ
ヲ被フラザルハ、兵士ノ勇氣ニ依リ、マタ其兵士ヲシテ專
横驕恣ナラシメザルモノハ、一國人民ノ勇氣ニ依ル、要ヲ
取テ之ヲ言ヘバ、勇也者ハ社會ノ精神ナリ、邦國ノ守護神
ナリ。我輩ガ人ノ人タル地位ヲ占有シ、奴隸ノ苦境ニ陷ラ
ズ、禽獸ノ形態ニ隔離セル所以ノモノハ、斯勇氣アルニ由
ルナリ。然レバ則チ勇氣アルヲ以テ榮譽トスルトキハ、勇
者ヲ生ジ、怯懦ナル者ヲ以テ輕賤スベキモノナリトスル
トキハ、怯懦ナル者自ラ鮮キニ至ラント。左レバ一事ヲ成
シ一業ヲ成ス、亦ヨク怯懦ニシテ果シ遂グベキモノニア
ラザルナリ。故ニ古人モ士以テ弘毅ナラザルベカラズ、任

重フンテ道遠シトイヘリ。然ルニ今世ノ人士、多クハ優柔
卑弱ニシテ、而シテタマタマ批直ヲ銜ヒ、放言高談シテ自
得揚然タルモノナリ。殊ニ知ラズ、大勇ハ怯ノ如クニシテ、
剛強ハ柔弱ノ餘ニ生ズルモノナルコトヲ、古人謂ハズヤ。
真忠ハ舒徐ニ立チ、至忍ハ卑遜ニ生ズトイス、視ヨ赫然ト
シテ憤リテ發シ、戎服シテ鞍馬ニ御スル者ハ、清淨玄默ノ
主タル漢文帝ニシテ、絳衣大冠、大敵ヲ見テ勇ムモノハ、謹
厚柔順ナル光武帝ナリ。其中退然トシテ、衣ニ勝ザルカ如
ク、其言呐々トシテ口ヨリ出デザルガ如キ、趙文子ハ晉國
管庫ノ士七十餘人、生テ其家ヲ私セズ、死シテ其子ニ屬セ
ズ、張良ガ狀貌ハ婦人ノ如シ、卒ニ帝者ノ師タリ、首ヲ僂シ
手ヲ拱シ、言氣卑弱ナル、段文蔚ハ、笏ヲモチテ朱泚ヲ撃チ、

英烈凛トシテ秋霜ノ如シ。夫ノ丹波亦容貌醜陋ニシテ跛ナリ。其廣島城ヲ守ル。幕府ノ大權ヲ懼レズ。以テ留守ノ職任ヲ盡クス。何ゾ今ノ書生輩ガ。警吏ト爭論シ。若シクハ學士論者ヲ罵詈訾シ。民權家ヲ以テ自ラ任ズルガ如キモノナランヤ。然レバ則テ世ノ勇ヲ養ヒ。剛毅ノ氣象ヲ養ハントスル者ハ。文帝光武ノ君タル。趙文子。張子房。段文蔚。近クハ福島丹波ノ臣タルガ如キニ則トリ。小勇ヲ競フ者ヲ視テ。以テ剛毅ノ氣象アリト誤認スルコトナカシ。

第十一 飯田覺兵衛長崎ヲ戍リタル事

飯田覺兵衛ハ。初メ加藤清正ニ仕ヒ。數軍ニ從テ功アリ。朝鮮ノ役。淺野幸長ノ蔚山ヲ守リ。明軍ノ為ニ圍マル。ヤ。清正赴キ援ク。覺兵衛森本義太夫等ト之ニ從ヒ。明軍ト江中

ニ戰ヒ。其戰艦ニ隻ヲ奪ヒ。而シテ蔚山ニ入リ。夜明將李如梅ガ營ヲ襲ヒ。之ヲ破ブル。清正ノ既ニ卒スルヤ。其子忠實立ツ。嘗テ左右ニ謂テ曰ク。我願クハ多カノ人トナリ。尊甲ヲ重贍シ。以テ銃丸ノ害ヲ免ヌガレント。覺兵衛座ニ在リ。進ムテ曰ク。主公何ゾ。其言ハ怯ナルヤ。先君ハ世ニ在ル。堅ヲ破リ。銃ヲ摧キ。賤介獄ニ於テハ。七槍ノ一タリ。其他陷陣先登。數奇功ヲ建ツ。大小數十戰。未ダ嘗テ一タビモ創痕ヲ被ハズ。遂ニ征韓ハ役ニ及ビ。其先鋒トシテ。雞林ハ道ヲ蹂躪シ。鬼將軍ハ名猶ホヨク兒啼ヲ止ム。而シテ善スル所一領ハ甲ニ過ギズ。ソレ主將タル者ハ。苟モ能ク其將卒ヲ愛撫ヒバ。指揮ニ從フコト。其手足ヲ使フガ如シ。然レバ則チ全軍ハ甲ハ則チ主將一人ニシテ重贍スル者トイフモ可

ナリ。若シ將卒離反セバ、主公縱使百甲ヲ重襲セラル。亦何ノ用ヲカ為サンヤ。何ゾ主公ハ言ハ怯ナルヤト。遂ニ號哭シ而シテ退ク。獨リ自ラ歎ジテ曰ク、加藤氏ハ凶滅甚ダ。遠カラズト果シテ忠廣事ニ坐シテ國除セラル。覺兵衛去テ京師ニ隱クル。後チ黒田氏ノ招ギニ應ズ。タマタマ隊將ヲ以テ出テ長崎港ヲ戍衛ス。蠻船ノ港頭ニ來ルアリ。覺兵衛守備ヲ嚴ニス。且ツ援兵ヲ徵發セントス。覺兵衛敢テ援ヘテ請ハズ。部下ノ士ミナ之ヲ忖メテ曰ク、虜情ハ測リ難シ。若シ緩急ニ臨ミ、寡ヲ以テ衆ヲ拒ガハ難シ。何ゾ援兵ヲ請ハザルヤト。覺兵衛笑フテ曰ク、我命ヲウケテ茲ニ屯守ス。緩急ニ備フル為メニアラズヤ。然レバ則チ縱使虜船ノ海ヲ掩フテ來寇スルコトアリトモ、亦戍衛ノ任ヲ辭スベキニアラズ。何況ヤ葉大ハ一隻船ヲヤ、未ダ千戈ヲ交ルニアラズシテ、倉皇救援ヲ請フ。我天下ノ笑ヲ買フテ、黒田氏ニ貽クルコトヲ恐ルハナリ。吾初メ任ニ赴キシヨリ、既ニ一死以テ其職ヲ盡サンコトヲ吾心ニ誓ヘリ。若シ事變アルニ遭際セバ、死カヲ盡シテ之ヲ戍リ、力敵スベカラザルニ至テ斃レンハミ、何ゾ援ケテ請ハンヤト。部下ハ士ミナ屈服ス。覺兵衛自ラ短舸ニ乘リ、兵士ヲ部勒ス。坐作進退、左ナガラ平地ヲ走ルガ如シ。世人之ヲ稱ストイフ。

櫻所子曰、覺兵衛ガ長崎ヲ戍ルコト、夫ノ小川傳右衛門ノ龍泉城ヲ守ル事ト相似タリ。共ニ一死ヲ分トシテ、援軍ノカヲ假ルコトヲ欲セズ。其命ヲウケテ茲ニ屯守スルハ、豈ニ緩急ニ備フル為メナラズヤトイフモノ、能ク其職任ヲ

盡スモノタルヲ知ルニ足ンリ。且ツ夫ノ忠實ノ重甲ヲ藺
ハントイフヲ聞キ、清正ニ肖サルヲ歎ジ。將卒ヲ愛撫セバ、
全軍ヲ使フコト手足ノ如クナルベシ。將卒ニシテ離反セ
バ、百甲ヲ藺フトイヘドモ、亦可ノ用ヲカ為サンヤトイフ
モノ。覺兵衛ガ心裡、既ニ將卒ノ心ヲ収攬スルハ所謂將ニ
將タルノ道ナルコトヲ知了セリ。而シテ加藤氏ノ凶滅ス
ル遠キニ非ルヲ歎ズ、亦先見アルモノト謂フベシ。又ソノ
京都ニ在ルトキ、人ニ語テ、我生涯肥前侯ノタメニ瞞著シ
了セラレタリ。何トナレバ吾ガ軍ニ從フ。矢丸雨下シ、骨飛
ビ肉翻ル。奮進勇往。屍ヲ踰テ敵ト戰フ。軍既ニ罷ミ、顧ミテ
同儕ヲ視ルニ、死傷狼藉タリ。乃チ惻然トシテ意ニ武人タ
リシコトヲ悔中、マサニ甲冑ヲ脱シテ去ラントス。則チ侯

吾ヲ視テ曰ク、今日ノ大捷ヲ得タルハ、全ク汝ガ功ナリト。
厚賞重賜隨テ至ル。吾其知遇ニ感ジ。去ラント欲シテ去ル
ニ忍ビズ。遂ニ一隊ニ將タリキ。是豈ニ肥前侯ニ瞞遇セラ
レタルニ非ズヤト語リシモノ。亦以テ覺兵衛ガ真率ニシ
テ邊幅ヲ修飾スルノ人ニ非ルヲ視ルニ足レリ

第十二 佃次郎兵衛正木ノ孤城ヲ守リテ援軍ヲ謝絶

シタル事

佃次郎一成ハ、加藤嘉明ニ仕フ。朝鮮ノ役嘉明ニ從ヒ唐島
ヲ攻ム。一成矢丸ヲ冒シ、敵船ニ登ル。虜劍ヲ以テ其口ヲ刺
ス。一成奮戰健闘ス。虜マタ挺シテコレヲ海中ニ倒ス。一成
善ク泗グ。其奴熊谷某薙刀ノ幹ヲ授ケテ之ヲ撻フ。一成既
ニ登リ。跳テ虜船ニ乗ジ。數人ヲ殺傷ス。嘉明海軍ノ功。一成

ヲ以テ最^ス。關原ノ役、嘉明家康公ニ從テ東征ス。一成及
ビ加藤内記等ヲシテ、伊豫ノ正木ノ城ニ留守セシム。而シ
テ石田三成、兵ヲ京畿ニ擧グ。海内分レテ東西トナル。毛利
氏首トシテ西軍ニ應ジ。嘉明ノ在ラサルニ乘ジ。其將村上
掃部、曾根兵庫等ヲシテ、兵三千ヲ率^キ。伊豫ニ入テ正木ノ
城ヲ環攻セシム。使^リテ城中ニ遣ハシ。諭スニ城ヲ致スヲ以
テス。若シ否ラサレバ則チ、一撃シテ蹂躪セントス。一成詐
テ之ニ答ヘテ曰ク、請^フ盡ク妻孥ヲ出シ。而シテ後子城ヲ
致サント。村上等之ヲ信ジ。退テ三津浦ニ陣ス。一成益^シ守備
ヲ修ハ。時ニ藤堂氏ノ兵、大洲ノ城ヲ守ル。人ヲシテ救援ヲ
約セ^ル。ハ、城中大ニ喜ブ。一成獨^リ奮^テ曰ク、敵衆多ナリト。
雖^モ義^以テ之ヲ守リ。謀^以テ之ヲ撃ツ。何^ノ勝^タザルコ^ト。

トコロアラシヤ、即チ利アラズ。ハ、城ヲ枕ニシテ之ニ死
セ^ル。ハ、安ゾ人ノカヲ假^リ、以テ功名ヲ僥倖スベケンヤ
ト、即チ藤堂氏ノ援ケヲ辭ス。タマタマ疆内ニ叛ク者アリ。
酒穀ヲ敵營ニ餽ル。一成之ヲ聞キ。陰カニ民ノ慧黠ナル者
數人ヲ募リ。其妻子ヲ質^トシ。多ク金ヲ予ヘテ反間ヲ縱^ク。
シメテ曰ク、加藤氏ノ正木ヲ領シテヨリ。苛政民ヲ窘シム。
今藝州ノ大師我疆ニ臨マル。百姓簞食壺漿シテ、悅服ノ色
ヲアラハサバルハナシ。且ツ嘉明ノ東征ニ從^フヤ。其精銳
ヲ盡クシテ自ラ從ヘタレバ。今城ニ留守スルモノハ、ミナ
羸弱怯劣ニシテ戰フ能ハザルモノ、之^レ而シテ佃次郎其
衛ハ。現ニ病瘠一在リ。一城マタ鬪^フ志ナシ。多クハマサニ
遁逃セントスル者ノミト。毛利氏ノ兵之ヲ聞テ益^シ備ヘテ

弛ム。其一人潛カニ歸テ時ノ可ナルヲ報ス。一成其兵卒ヲ
シテ。ミナ白布ヲ肩ニ尚ハヘ。以テ標幟ト為サシメ。身特ニ
松字ヲ背ニ畫キ以テ之ヲ被リ。令シテ曰ク。敵ヲ斬リ首ヲ
取ル勿レ。螺ヲ聞カバ則チ退ケト全軍放ヲ呻ミ。夜間道ヨ
リ進。直チニ敵營ヲ襲撃シ。火ヲ氏舍ニ放シ。毛利氏ノ軍
擾亂ス。一成薙刀ヲ提グ。兵ヲ督シテ奮戦シ。村上掃部等敵
將三人ヲ斬リ。身創ヲ被テ退ク。既ニシテ翌日昧爽。敵兵來
リ攻ム。加藤内記。出デ、之ヲ道後村ニ拒グ。一成創ヲ裹ム
デ起テ曰ク。敵大兵ヲ擁シ重ネテ來ラバ。則チ其支フベカ
ラサルヲ懼ル。吾病床ニ死ナンヨリハ。寧ロ快戦シテ尸ヲ
原野ニ暴サント。乃チ多クノ紙旗ヲ造ラシメ。城下ノ民ニ
百餘人ヲ驅テ疑兵ヲ張リ。道後村ニ赴ク。藝兵望ムデ以テ

大援ノ至ルト為シ。即チ兵ヲ引テ去ル。遂ニ風早浦ヨリ。船
ニ乘テ藝列ニ歸ル。東軍已ニ捷ヲ。天下ノ形勢之ニ定ル。嘉
明正木ニ歸リ。一成ガ功ヲ論ズ。而シテ首級ノ徵トナスベ
キナシ。タタタ生虜アリ告ゲテ曰ク。當夜松字ヲ背ニ畫
キタルモノアリ。薙刀ヲ揮テ村上等ヲ斬レリト。嘉明乃チ
勲狀ヲ與ヘテ曰ク。他人ニ假ラスシテ。能ク一城ヲ全フス
ルハ義ナリ。敵將三人ノ首ヲ斬リ。其功ヲ言ハサルハ勇ヲ
リト。之ヲ賞スルニ豐公賜フ所ノ鎧ヲ以テシ。祿六千石ヲ
益ス。慶長八年。嘉明勝山ニ城キ。コトニ徙リ。名ケテ松山ト
イフ。其北ニ一寨ヲ築キ。一成ヲシテ守ラシム。大坂ノ
役。嘉明ノ長子明長ニ從テ功アリ。幕府一成ヲ召シ。江戸ニ
赴ク。葵章ノ服ヲ賜フ。嘉明ノ封ヲ會津ニ移スヤ。一成ニ

萬石ヲ加賜ス。慶長十一年病ヲ以テ歿ス。
櫻所子曰慶長五年ノ役東西兩軍ニ屬スル所ノ諸侯各其
精銳ヲ盡クシ以テ龍ノ誰ガ手ニ落ツルヤヲ中原ニ決ス。
其國ヲシテ空虚ナラザラシメント欲スルモ。將カカサ
ルハ。理勢ノ自ラ然ル所ナリ。而シテ敵兵其處ヲ構シメキ
ハ。根柢タメニ揺撼セラル。留守ノ任亦重シ。一成孤城ヲ守
其毛利氏ノ大兵ヲ受ケテ屈セズ。能ク捍禦ノ策ヲ運ラシ
タルノミナラス。他人ノ力ヲ假テ。功名ヲ僥倖スルヲ耻ヂ。
大洲ノ援兵ヲ辭シ。一タビ戰テ敵ヲシテ本國ニ歸ラシム。
嗚呼亦偉矣哉。

第十三 大久保彦左衛門規諫ヲ諷諭ニ寓ゼシ事

大久保彦左衛門忠孝ハ。平左衛門忠貞ノ子ナリ。世徳川氏

臣タリ。其人トナリ豪俠ニシテ屢戰功アリ。祿五千石ヲ
食ム。嘗テ家康公ニ駿府ニ謁ス。公往事ヲ語り。談々マタマ
關原ノ役ニ及ブ。公曰ク。予ガ關原ノ役ニ於ケル。景勝ハ會
津ニ據リ。三成ハ上國ヲ占ム。前後ミナ敵ニシテ。我軍股栗
ス。而シテ我一タビ西ニ向フニ及ビ。大敵ヲシテ上崩瓦解
セシムルコト。恰モ枯ヲ撲チ朽ヲ壞ルガ如シ。我が志ヲ中
原ニ得ルモノ。此一役ニ在リ。然ハ則チ我が畢生ノ快。此戰
ニ過グルハナシト。忠孝答テ曰ク。實ニ殿下ノ宣フ所ノ如
シ。然レドモ殿下東シ。景勝ヲ征セントシテ。小山驛ニ在ル
ニ至リ。羽書旁午シ。敗報日一至ル。殿下鬱々トシテ。樂マザ
ルモ。累日。顔面蒼色ニ變ジタリキ。今ヤ四海靜寧ニ屬シ。
士民大平ヲ謳歌シ。武ヲ偃セ。文ヲ脩ム。殿下ノ顔ヲ拜スル

二。妻氣眉宇ニ溢レ、血色潤明ナリ。是最モ快ト爲スベキモ
ノ。ニ非ズヤト。公笑テ曰ク、彦左多言スルコト勿レ。
幕府饗禮アリ。忠孝タマタマ謁。公命ジテ之ニ饗禮進ム
所ノ鶴羹ヲ賜フ。忠孝退テ外廳ニ坐シ。之ヲ喫スル數椀。
而シテ入テ謝シテ曰ク、某賜フ所ノ羹ヲ嘗ム。其賜タル多
シ。然レドモ某カ家亦此物必カラズ。公恠ニ問テ曰ク、汝ガ
薄祿ノ家如何ソ能ク然ランヤト。忠孝曰ク、恠マル、コト
勿レ。某翌朝ヲ以テ之ヲ獻ズベシト。明朝青菰ヲ盤中ニ堆
積シ。自ラ捧ゲテ以テ獻ズ。曰ク昨日某ニ賜フ所ノモ、ハ
則チ是ナリ。但某カ家ニ於テハ之ヲ青菰ト呼做ストイヘ
ド、モ幕府ハ朝ニ在テハ之ヲ鶴ト稱セラル、ノ。ト。公哂
テ之ヲ納レ。乃チ近侍ノ臣ニ命ジテ庖人ヲ數ハ。

三代將軍家光公職ヲ繼グニ及ビ。天草ノ賊起ル。衆相語テ
曰ク。討手ノ將タルモノ。肥後侯ニ非レバ。則チ久留米侯ナ
リ。若シ然ラズンバ筑前侯ナラント。忠孝之ヲ聞テ曰ク、否
否。吾ガ思考スル所ニ據レバ。我公ハ定メテ南光坊ヲシテ
征討セシメラルベシ。若シ然ラズンバ春日局蓋シ其人ナ
ラシ。衆曰ク兵馬ノ事ハ固ヨリ僧侶ト婦女トノ與カル所
ニ非ズト。忠孝又曰ク。惡ゾ其然ラン。我公南光坊ヲ寵シ。春
日局ヲ幸シ。優遇渥待。左ナガラ宿將老臣ト異ナルナシ。我
公ハ賢且明ナル何ゾ無用ノ人ヲ寵幸セラレンヤ。我ハ則
チ之ヲ以テ這回征西ノ事必ズ此二人ハ外ニ出ザルベシ
ト。信ズルナリト。

忠孝家康秀忠家光ノ三公ニ歷事シ。家光公コレニ祿五千

石ヲ加賜シ、諸侯ニ列セシメント欲セシカドモ、固辭シテ受ケズ。耆病ヲ以テ敢テ人ニ屈セズ。往々規箴ヲ諷諧ニ寓ス。年八十ニシテ歿ス。

櫻所子曰。大久保彦左衛門ノ事既ニ人口ニ膾炙スル所ナレバ、其傳フル所ヲ記述スルヲ要セズシテ可ナリ。其人固ヨリ滑稽ニ長ズトイヘドモ、然カモ勇武敢テ人ニ讓ラズ。忠謹ノ氣言外ニ溢フル。方正剛直ノ人ニアラズンバ、惡ク能ク如此ナルヲ得ンヤ。

第十四 里正某領主ノ言ニ服役セザリシ事

武藏ノ河越ニ村アリ。備後村トイフ。里正某、世備後ト稱ス。酒井備後守忠利、封ヲ河越ニ移スニ及ビ、夫ハ里正ニ命シテ名ヲ改メ、シム、聽カズ。既ニシテ忠利領内ヲ巡行スルニ

際シ、其里正ヲ召シテ面タリ之ヲ諭シテ曰ク、官民名稱ヨ同フマルハ禮ニ非ズ。汝ガ宜ク速カニ改ムベシト。里正服セシテ曰ク、小人此土ニ里正タリシヨリ、貢税夫役スヘテ他ノ村落ニ後レズ、以テ其職ヲ盡クス。公ノ知ル所ナリ。今何ノ罪戾アリテ、祖先以來、讎ヲ所ノ名ヲ改メタルヲ領主ノ命ナリト雖、下モ小人敢テ從フコトヲハサルナリト。忠利曰ク、然ラバ我ハ河越ノ備後、汝ガハ則チ一村ノ備後ナリト。家康公之ヲ聞キ嘆ジテ曰ク、凡ソ人ニ責ムルニ必要ナラザル事ヲ以テシ、以テ己レガ威福ヲ張ラシトスルモ、ハ編局ノ人ノ事ナリ。忠利ノ寛仁大度ナル庸人ノ企及スル所ニアラズト。

櫻所子曰。昔時武門權ヲ專ニシ、尋常農商ノ輩ハ、亦人類ノ

最下二位スルモノ、如クナリシ。然ルニ備後村ノ里正某
ノ如キ。敢テ領主ノ威權ニ屈セズ。其名ヲ改ムルコトヲ否
ム。而シテ忠利亦敢テ怒ラズ。官民相協フ。其領主ノ寛大ナ
ル。其里正ノ朴直ナル。以テ想ヒ見ルベシ。

第十五

松平信綱幼ニシテ剛毅ナリシ事

伊豆守松平信綱ハ、徳川氏守成ノ良臣ナリ。初メ家光公ノ
世子タリシ時信綱阿部忠秋等ト其左右ニ侍マ。世子タマ
タマ乳雀ノ檐檣ニ在ルヲ視。近侍ニ命ジテ之ヲ捕ラシム。
而シテ其乳雀巢ヲ所ノ屋ハ。則チ將軍秀忠公ノ燕寢タリ。
衆敢テ往クコトヲ欲セズ。衆輒チ信綱ヲ推ス。年幼ニシテ
軀輕キモノ宜ク此任ニアタルヘシト。信綱勉強シテ命ニ
應ジ。夜ニ入テ竊カニ屋ニ縁テ雀兒ヲ摸索ス。誤ラ脚ヲ失

シテ墜ツ。時ニ庭中閑寂。タマタマ物アリ屋ヨリ墜ツル響
キアルヲ以テ。秀忠公刀ヲ提ゲ。夫人燭ヲ秉リ。戸ヲ推シテ
庭砌ヲ見レバ則チ信綱ナリ。公其所由ヲ問フ。曰ク。雀兒ヲ
視テ之ヲ獲ント欲シ。竊カニ來リ捕フルノミト。公之ヲ詰
リテ曰ク。是必ズ汝ガ心ニ出ルニアラズ。汝ヲシテ之ヲ捕
ラシムルモノアルベシト。信綱敢テ告クルニ實ヲ以テセ
ズ。公乃チ信綱ヲ大囊ニ内レテ之ヲ柱ニ懸ケ。汝ダ告グル
ニ實ヲ以テセズンバ。此囊ヨリ出ルコトヲ允ルサズト。翌
朝公出ツ。夫人其飢ヲ慮カリ私カニ囊口ヲヒラキ。食餌ヲ
與ヘ。復タ之ヲ緘シテ初メノ如クス。公歸テマタ數次之ヲ
窮詰ス。信綱遂ニ其辭ヲ改メス。夫人頻リニ請フテ信綱ヲ
放ルス。公之ヲ目送シテ曰ク。他日我兒ヲ輔翼シ。能ク其心

ヲ竭クスモノハ、ソレ信綱ナランカト。果シテ公ガ言フ所
ノ如シ

櫻所子曰。松平豆別ハ德川氏ノ名臣タル。世人ノ遍ク知ル
所ナリ。其剛毅不屈ニシテ。主公ノタメニ計ルノ忠ナル。如
齡ニシテ世子ニ侍スルノ日ニ於テ。既ニ之ヲ見ル。

第十六 那波活所貴戚ヲシテ感悟セシメタル事

那波活所ハ、播磨ノ人ナリ。其祖實ニ服シ。家貧頗ル饒カナ
リ。素封ヲ以テ稱セラル。活所幼キヨリ。澹然トシテ財貨ヲ
事トセス。惟書ヲ讀ミ。字ヲ寫スコトヲ喜ブ。其父之ヲ異ト
シ。乃チ實ヲ舍テ、以テ儒ト鑒トヲ學バシム。而シテ鑒ハ
其好ム所ニアラザリキ。年十七ニシテ京都ニ赴キ。弟子ノ
禮ヲ執テ惺窩翁ニ謁ス。社鵬ノ詩ヲ作り。コレヲ翁ニ眎ス。

翁大ニ其詩ヲ稱賞ス。此ニ由テ重名アリト云フ。活所年二
十九ニシテ。肥後侯ノ辟ニ應ズ。加藤氏ナリ。後未ダ幾クナ
ニ國除セラルラズ。遇ヒラレズシテ去ル。四十一ニシテ紀伊侯ニ仕フ。活
所人トナリ。剛直ニシテ。苟モ合スルコトヲ欲セズ。其仕フ
ルヤ必ズ蹇蹇ノ節ヲ盡クス。而シテ紀伊侯ノ之ヲ信任セシ
モノ。明良ノ遇ト謂フベキナリ。寛永中。林學士諸家ノ系譜
ヲ撰フコトアリ。活所召サレテ其事ニ與カル。タマタマ眼
疾アリ辭シテ歸ル。爾後全ク瘳ズ。貴戚勇武絶倫ナリ。其佩
刀ノ利鈍。必ズ自カラコレヲ人ニ試ム。嘗テ一刀ヲ得タリ。
備前長光ノ鍛スル所トス。乃チ罪アル者ヲ執ヘテ。立ドコ
ロニ之ヲ斬ル。左右ミナ辭ヲ迭ヒニシテ以テ稱讚ス。活所
獨リ。頌ヲ蹙メテ言ナシ。貴戚問テ曰ク。漢上ニモ亦刀ノ利

トカヲ執ルハ、婢ト此ハ如クナルモ、アリヤト。活所曰ク、龍泉太阿、千將莫邪ノ類、是ミナ彼邦ノ名器ナリ。水ニ蛟犀ヲ截リ、陸ニ虎兕ヲ斷ル、其利キコト之ニ譲ラズ。又人君ニシテ、手ツカラ人ヲ斬リ、而シテ其心ニ快シトスル者ハ、古ヘハ人之ヲ行フ者アリ、夏ノ桀、殷ノ紂、王ノエトキ、是ナリ。吾邦亦罪人ヲ斬リ、能ク之ニ堪タル者アリ、穢多ト稱ス。最モ卑賤ナルモノナリト。貴戚黙思良、久フシテ曰ク、卿ガ言極メテ善シ。件事ハ吾何ノ心ゾヤト。厚ク褒賜ス。貴戚マ々嘗テ活所ニ謂テ曰ク、吾不幸ニシテ、良士ヲ得ズト。活所曰ク、嗚呼、是何ノ言ゾヤ。惟フニ今君ノ部下、智勇ノ士、其人知之シカラズ、而シテ以テ未ダ足ラズト為スモノハ、但君ノ知ラザルハ、ト、貴戚大ニ感悟ス。惺窩翁ノ門人ニ、武田

某トイフモノアリ。其父歿ス。コレヲ惺窩ノ墓側ニ埋ム。猶ホ合葬スルモノ、ゴトク然カリ。人ミナ其禮ヲ知フサルヲ嗤フ。然レドモ敢テ為メニ之ニ告グルモノ無シ。活所以為ク、徒ニ已ムベカラザルナリト。遂ニ面論シテ之ヲ改葬セシム。活所年五十四ニシテ、京都ニ歿ス。正保五年ノ正月ナリ。

櫻所子曰、活所ガ剛直ナル。其主ニ事フルニ、能ク謇諤ノ節ヲ盡クシ。其同門ノ人ニ接スルニ、能ク忠愛ノ信ヲ致ス。真ニ孔子ノ道ヲ學ビタルモノト謂フベキナリ。而シテ昔人活所ガ事ヲ記スルニ、其刀ヲ罪人ニ試ムルト。不幸ニシテ、良臣ナシトイヒシトヲ以テ、貴戚ト記スルノミ。蓋シ以テ為ク是紀別候ナリ。當時憚ル所アリテ、其名ヲ明記セザルノ

ミ。當時千戈漸ク収マリ。守成ノ世トナリシトハイヘ。腥血ヲ以テ寶刀ニ膏スルガ如キ。武人ノ敢テ恠マガル所ナリ。然ルニ活所一介ハ儒士。固ヨリ其主ニ驕ルホトノ名望アルニアラス。恃ムデ以テ主公ノ怒ニ抗スルホトノ勲勞アルニアラス。而シテ漢土ニ如此利刀如此利刀ヲ執ルノ妙アリヤトノ問ニ對ヘテ。夏桀殷紂之ヲ行フトイヒ。吾邦ノ穢多ハ。罪人ヲ斬ルヲ職トスルトイフニ至ル極諫スルモノト謂フベキナリ。苟モ微俸小祿。一儒士ニシテ。此言ヲ為ス。已レモ亦彼ノ罪人ト同ジク。利刀ノ利ヲ其身體ニ試ミラルベキヲ豫期セズンバ。敢テコレヲ口ヨリ發スベキニアラス。活所ガ剛直ニシテ其主ニ枕爭スルノ節義ハ。固ヨリ先登陷陣ノ功。搦旗擒將ノ勲ト。相匹敵スルノミナラ

ズ。遙カニ其勲功ニ超駕スル所アリト謂フベシ。活所其主ニ事フル。其誠ヲ致スコト此ノ如シ。其同門ノ士ニ面論スル。敢テ他ノ其禮ヲ知ラザルヲ嗤笑シテ。敢テ為メニ之ヲ告グルナキノ類ナランヤ。且ツ夫ノ紀州侯。亦富貴ニ長生シ。左右ミナ唯々諾々ノ輩ノミ。而シテ佩刀ノ利鈍ヲ罪人ニ試ムルガ如キハ。コレヲ酒色ニ沈湎スル等ノ事ト。固ヨリ日ヲ同フシテ語ルベカラズ。然ルモ猶ホ活所ガ之ヲ罵テ。桀紂ニ比シ穢多ニ擬スルノ諫ヲ容レ。厚ク此ヲ褒賞スル者。徳川氏ノ親藩ニ主タルニ耻ヂサル者ト謂フベシ。下ニ在テ上ヲ諫ムルコトハ難シ。上ニ居テ下ノ言ヲ納ル。亦易スカラス。朋友相忠告スルニ於ケルモ亦似タリ。之ヲ以テ剛直ナル者。多ク世ニ容レラレズ。佞媚ノ人概ネ志ヲ

得ルニ至ル意。

第十七 谷三郎左衛門嚴毅剛直ナリシ事

谷三郎左衛門字ハ時中。素有ハ其名ナリ。土佐ノ人。其家世
農ヲ業トス。時中學ニ志シアリ。書ヲ高知ノ真常寺ニ讀ム。
寺淨土真宗ニ係ル。住持ノ僧天室ニ從テ學ブ。遂ニ教ニ從
ヒ。髮ヲ削テ慈沖ト號ス。後々真淨寺ニ住ス。毎ニ緇徒ヲ集
メテ佛經ヲ講説スルノ餘暇。好ムデ儒經史傳ヲ讀ミ。後々
釋門ヲ出デ、復飾シ。儒ト鑒トヲ以テ高知ニ教授ス。時中
カ嘗テ真淨寺ニ住持タリシ時。挹遜シテ人ニ降ラズ。固ヨ
リ。屈スル所ナシ。權要ノ士ニ遇ヒテモ。唯長揖スルノミ。未
ダ嘗テ之ヲ拜セズ。マタ貴胄豪族ニ逢フトキモ。直チニ之
ヲ名イフ。様或ハ殿ヲ以テ呼バズ。人以テ矜誇ナリト為ス。

士人アリ。大ニ其不遜ナルヲ怒リ。小ヲ揮テ將サニ之ヲ
脅恐セシメントス。曰ク。賣僧何ノ德アリテ。常ニ士大夫ノ
上ニ位シ。而シテ飽食煖衣スルヤ。若シ一言ノ説クベキ無
クシバ。身首忽チ處ヲ異ニセントイハテ。白刃ヲ其領下ニ
加フ。時中自若トシテ。神色少クモ變セズ。輒チ曰ク。爾ガ
欲スル所ニ任ス。我死生ヲ視ルコト一ノ若シ。何ゾ以テ畏
怖スルニ足ランヤト。士人ノ異トシテ。敢テ害ヲ加ヘズ。
時中儒典ヲ訪求セシトキ。喪亂ノ後々。僅カニ干戈ヲ脱シ。
圭運未タ開ケズ。書ヲ獲ルコト最モ難シ。況ヤ海南ノ僻邑。
搜索スレドモ之ヲ得ルニ由ナシ。之ヲ京都大坂或ハ長崎
ニ求メ。年ヲ積ムデ後々。多ク之ヲ儲藏スルニ至レリ。家本
ト貧シカラザリシモ。書籍ヲ購求スルヲ以テノ故ニ。資産

ノ過半之ガ為メニ盡ク。嘗テ人ニ語テ曰ク。縱使饒資豐産
ナリトモ。苟モ志ヲ失ハビ。良田千頃。コレ以テ子孫ニ嘉貽
スル所ニアラズト。乃チ數頃ノ田僅カニ以テロヲ餬スベ
キモノヲ存シ。他ハ悉ク之ヲ賣却セリトイフ。時中ガ程朱
學ヲ高知ニ唱フルヤ。當時コレヲ南學ト稱シ。從學スル
者甚ダ衆シ。土佐侯松平忠義屢時中ヲ徵ス。時中侯ノ使者
ニ謂テ曰ク。土佐一列ノ民ハ。祿ヲ公廩ニ食ハサルヲ以テ。
何ゾ必ズシモ臣僕トスベキ者ニ非ズトセンヤ。國ニ在ル
ヲ市井ノ臣ト謂ヒ。野ニ在ルヲ草莽ノ臣ト謂フ。其叨リニ
虚名ヲ負ビ。儒術ヲ以テ嚴聽ヲ駭カス。然リト雖ドモ。學未
ダ蘊奧ヲ極メス。躬自カラ道義ヲ研磨スルニダモコレ暇
アラズ惡ンゾ以テ公侯ニ師標タルニ足ランヤト辭シテ。

就カズ。侯及ビ其士大夫。是ヨリ益時中ヲ崇重ス。時中天資
豪剛ニシテ。操行堅確ナリ。存養踐履ノ實行篤學ヲ景慕シ。
績密厚重シ。造次顛沛。少クモ懈タラズ。其門生ニ於ケル訓
導頗ル嚴ナリ。野中兼山。小倉三省。山崎闇齋。ミナ其誨督ヲ
被フリシモノナリ。左レバ闇齋ガ師道ノ甚ダ嚴重ナリシ
ガ如キ。蓋シ時中ニ薰陶セララル。所ナリトイフ。慶安二年。
病ヲ以テ家ニ歿ス。年ヲ享クルコト五十二ナリ。
櫻所子曰。時中始メ佛乘ニ入り。之ヲ厭フテ儒ニ歸ス。然リ
ト雖ドモ其士人ノ骨カス時ニアタリテ。神色變セズ。自若
トシテ死生ヲ一視セルモノハ。蓋シ不生不滅ノ理ヲ説ク。
佛教ノ門牆ヲ窺ヒ得タルニ由ルモノナランカ。其傳家ノ
資産ヲ賣却シテ。書籍ヲ購買スルノ料ニ供シ。良田ハ以テ

子孫ニ嘉貽スル所ニ非ズトイヒ。聖賢ノ書ヲ讀ミ。道義ヲ講明シ。以テ之ヲ後世子孫ニ遺コサントス。是易經ニ所謂。積善餘慶。積不善餘殃ノ理ニ鑑ミ。司馬溫公ノ所謂。陰德ヲ積ム。テ子孫ニ貽スノ謀ヲ取ルモノニ似タリ。是等ノ言。儒書中ニ往々コレアリトイヘドモ。善惡變化。殃福異處ノ理致ハ。佛教ノ詳説スル所ナリ。時中ガ為ス所。其好ム所ニ僻スルニ由ルモノナリト雖ドモ。抑モ亦先入シテ主トナルモノアルニ由ルモノ、如シ。且ツ其師道ヲ重ンズル。是亦儒ニ比スレバ。佛教ヲ以テ最モ嚴肅鄭重ナリトス。其存養踐履ノ實行篤學ヲ貴ブトイフモノ。儒ノ禮ヲ守ルニ比スレバ。佛ノ戒律ノ嚴密ナル。固ヨリ日ヲ同フシテ語ルベカラズ。是ニ由テ之ヲ觀ルニ。時中釋ヲ出デ、儒ニ入ルト雖

ドモ。佛徒タル時ノ習氣自カラ除カズ。以テ一種ノ品行ヲ立テ。以テ學徒ノ敬崇スル所トナリ。遂ニ士大夫ニ重ンゼラル。ニ至リシモノナルベシト思ハル。今ノ僧侶ノ如キ。童ニ權要ノ士ニ對シテ。長揖シテ拜セザルガ如ク。ナル能ハザルノミナラズ。媚ヲ村野ノ翁媼ニ獻ジ。貴胄豪族ニ向テ名イフ能ハザルノミナラズ。賤人貧者ニ對スルモ敢テ名イハズ。法ヲ賣テ生活ヲ計ルノミ。而シテ教正講義ノ職。叙ニ熱中シ。人ノ為ニ敬崇セラレンコトヲ求ム。時中ガ嚴毅方正ナルヲ聞テ。少ク慚愧懺悔スル所ヲ知ルベキ也。

第十八 伊藤才藏紀列侯ノ前ニ於テ書ヲ講ゼシ事

伊藤才藏ハ。長堅ト名ケ。蘭嶮ト號ス。仁齋ノ第五子ナリ。博學能文。其父兄ニ類ス。而シテ舉止端重ナリ。紀列公ニ仕フ。

其始メ經ヲ候ノ前ニ講ズルヤ。書ニ對シテ講セズ。滿座汗ヲ握リ。以為クコノ人寒素ニ生長シテ。未ダ大人ニ講説スルニ慣ハズ。則チ威儀嚴整ナルヲ視テ然ルナラント。中使之ヲ促セドモ應ゼズ。侯モ亦之ヲ訝カル。既ニシテ蘭嶋徐ロニ曰ク公。禪ニ坐ス。聖人ノ書ヲ講ズベカラザルナリト。侯之ヲ聞キ遠カニ禪ヲ去ル。是ニ於テ方ニ講説ス音吐朗暢。辯論明備。滿座ニ十數賞シテ曰ク。真ノ儒者ナリト。櫻所子曰。仁齋五男アリ。長ハ原藏。即チ東涯ナリ。次ハ重藏。正藏。平藏。才藏。是ヲ伊藤ノ五藏ト稱ス。ミナ以テ其家學ヲ世ニスルニ足ル。而シテ原藏才藏最モ著稱アリ。之ヲ伊藤ノ首尾藏トイフ。仁齋東涯ノ道學。固ヨリ近世儒士ノ類ニ非ズ。而シテ蘭嶋ノ事。亦以テ其道ヲ信ズルノ厚キ。權貴ノ

前ニ於テ元取テ忌憚スル所ナク。其禪ヲ去テ後チ方ニ道ヲ講ズルガ如キ。亦以テ其平生守ル所ノ如何ヲ視ルベシ。紀侯人爵尊シトイヘドモ。其天爵ニ至テハ蘭嶋敢テ讓ラズ。座者ノ之ヲ見テ。稱歎セル亦宜ナリ。古者吹彈歌舞。優伶ノ技ヲ以テ進ムモノスラ。猶ホ席末ニ在テ其技ヲ奏スルヲ否ナム。況ヤ修齊治平ノ道ヲ説クモノニ於テヤ。近世ノ學士。多ホクハ其學術ヲ販賣スル。恰カモ商估ノ為ス所ニ殊ナラズ。其學術ヲ受クルモノ。亦肆頭ニ貨物ヲ購フ。看ヲ傲ス。故ニ朝夕ニ師弟タリ。夕べニ路人タリ。道義ノ漸ク地ヲ掃フニ至リ。師道ノ衰廢ヲ極ムル亦宜ナル哉。

第十九 林鳳岡權貴ニ屈セザリシ事

林鳳岡。名ハ信篤。羅山ノ孫。春齋ノ男ナリ。先職ヲ襲ヒ。從五

位下大學頭トナル。晩ニ大内記ト稱ス。其人トナリ豪俊ニ
シテ。其學亦父祖ニ兼ケ。博聞多識一代ノ儒宗タリ。元祿中。
文學大ニ興隆シ。家讀戸誦ス。古來未ダ曾テ有ラザル所ナ
リ。初メ羅山聖祠ヲ忍今岡ニ新建ス。鳳岡旨ヲ奉ケテコレ
ヲ湯島臺ニ移ス。其經營規畫前ニ比スレバ更ニ宏麗ヲ加
フ。又宅地ヲ郭内ニ賜ハリ。以テ登城ニ便ス。蓋シ吾邦在昔
文學隆盛ナリト稱シケレドモ。皇綱漸ク弛解シ。保平已降
海内騷擾。士大夫ミナ筆ヲ投ジテ金革ニ從事ス。是ニ由テ
文藝ハ僧家ノ物トナリ。五山十刹ノ紹徒。文柄ヲ掌握セリ。
徳川氏ノ隆正ヲ致スニ及ビ。儒者別ニ家ヲ起スト雖ドモ。
猶目スルニ制外ノ徒ヲ以テシ。其髮ヲ髡シ士林ニ齒列セ
ズ。此レ戰國ノ餘習。未ダ革ムルニ及バガリシヲ以テナリ。

鳳岡慨然トシテ以爲久。儒ノ道ハ即チ人ノ道ナリ。人ハ外
ニ所謂儒道アルニアラズ。然ルニ之ヲ斥シテ制外ノ物ト
爲スハ。敝俗ト謂フベキナリト。乃チ此言ヲ上言シ。命ヲ蒙
リ髮ヲ種ヘテ。大學頭信篤ト稱ス。實ニ元祿四年正月ナリ。
是ニ於テ和田春堅ハ傳蔵ト稱シ。大河内春龍ハ新助ト稱
シ。林春益ハ又右衛門ト稱スル等。其餘諸藩ノ儒者。悉ク名
ヲ改メ形チヲ變ジ。以テ士林ニ列ス。爾來人賢愚トナク。儒
道ハ世用ヲ主トスルヲ知ルニ至リケルハ。實ニ鳳岡ノウ
ナリト謂フベシ。

鳳岡嘗テ貴戚ニ詣ル。主人岡ヨリ鳳岡ヲ重ムズ。乃チ延テ
座ヲ與ヘテ款語ス。時ニ天マサニ寒シ。鳳岡煙ヲ喫シ。且ツ
傲然トシテ曰ク。老人頭冷ナリ。巾ヲ用ヒザルヲ得ズト。

即チコレヲ懷中ニ取テ之ヲ著ク。既ニシテ主人鳳岡カ背
ヲ拊テ曰ク。膚理潤澤。老翁真ニ嬰鑠タル哉。鳳岡曰ク。肩
下。瘁ヲ作ス。少ク手ヲ伸バシテ之ヲ搔ケト。主人又曰ク。寡
人敢テ一言ノ守ルベキヲ請フト。鳳岡曰ク。唯此丘ヲ節セ
ヨト。當時市井ニ比丘尼ニシテ淫ヲ賣ルアリ。故ニ俚言好
色ヲ謂テ。比丘好ト為ス。其豪氣ニシテ權貴ニ撓マサル。多
クハ此類ナリトイフ。鳳岡門人頗ル多シ。桂山彩巖。松浦交
翠。徳力有鄰。安見晚山。莊恬逸。岡林竹等ハ。ミナ鳳岡ノ薦メ
ニ由テ。褐ヲ幕府ニ釋ク。其他儒ヲ以テ列侯ノ辟ニ應ゼシ
者。前後少ナカラズ。井上蘭臺。秋玉山ノ如キモ。亦鳳岡ノ門
ニ出ヅ。或ハイフ物茂卿モ亦鳳岡ノ門人ナリシト。鳳岡五
君ニ歷事ス。凡ソ六十年。元祿享保ノ間。最モ信任セラル。正

徳中。新井白石。寵光優渥ノリ。議頗ル諧ハズ。數致仕センコ
トヲ乞フトイヘトモ。允ルサレズ。其名望ノ隆ナルヲ以テ
ナリト。鳳岡ノ專ラ掌管スル所ニアリ。曰ク官爵。曰ク系譜。
曰ク喪服。其餘ノ機務輿リ聞ク所多カリシ。故ニ鳳岡ノ門
賓客常ニ填チ。勢上朝野ニ奮フ。子孫為ニ壽筵ヲ設ク。四方
幣ヲ致シ壽ヲ稱ス。其饋陳列シテ座ニ滿ツ。鳳岡喜バズ。人
曰ク。翁ノ厚福。方今比ナシ。今日ノ盛筵ヲ以テ之ヲ知ル。然
ルニ翁不豫ノ色アルハ何ゾヤト。鳳岡曰ク。若ダ知ラズヤ。
壽筵ハ是レ死ニ瀕スルノ一關ナリト。年八十一ニシテ致
仕シ。後チ八年病ヲ得テ没ス。享保十七年六月ナリ。
櫻所子曰。鳳岡修文ノ世ニ生マレ。儒者髪ヲ剃リ自ラ制外
ニ居ルニ甘ムズルノ風ヲ一革シ。而シテ新ニ祭酒ニ拜ス。

冠服初メテ儼然タリ。而シテ自カラ其道ヲ信ズルノ厚キ。
敢テ權門勢家ニ屈セズ。其豪爽不屈ノ氣象想ヒ見ルベキ
ナリ。徳川氏ノ季年ニ至リ。儒者ト稱スルモノ。權貴ニ諂諛
スルノ風漸ク盛ニシテ。其詩文ヲ讀メバ。風月ヲ嘲罵シ。山
水ヲ玩弄スルモノ。如ク。其行為ヲ察スレバ。一資半俸ヲ
得ルニ汲々タルモノ。ミ。脩齊治國ノ道ハ。之ヲ口ニ講ス
ルノミ。コレヲ躬ニ行フハ。古聖前賢ノコト。ナスノミ。氣
力ナク節操ナシ。此輩ハ特リ孔孟ノ罪人ノミナラズ。亦鳳
岡ノ罪人ナリ。今世歐學ヲ修メ。自治自主ヲ唱フル人。亦果
シテ鳳岡ニ凌駕スルホドノ豪爽不屈ノ氣象ヲ有シ。權貴
ニ撓屈セサルヤ否ヤ。恐クハ鳳岡ニ耻ルトコロ多ホカル
可シ。

第二十 太宰純嚴毅方正ナリシ事

太宰春臺

第二卷第十二
ト参考セヨ

少時江戸ニ來リ某侯ニ筮仕ス。志

ヲ得ズシテ去ル。是ヨリ後チ復タ仕官セズ。初メ中野撫謙
ニ從フテ。性理ノ學ヲ為ス。而シテ物茂卿ガ一家言ヲ成ス
ヲ聞キ。其學ヲ棄テ。コレヲ學ブ。巖村侯ノ世子春臺ヲ延
テ師ト為ス。其始メテ至ル。世子送迎セズ。春臺艱然トシテ。
曰ク。至賤ノ處士。烏ゾ敢テ貴人ニ傲岸センヤ。然リト雖ド。
モ。説ク所ハ則チ聖人ノ道ナリ。苟クモ道ヲ奉ズル者ハ。王
公ト雖ド。モコレヲ禮遇セサルヲ得ズ。而シテ其待ツ所甚
ダ薄キハ。是余ヲ禮セサルニハアラズ。即チ道ヲ奉ゼサル
ナリ。道ヲ奉ゼサル者ハ。余復タ敢テ見ルヲ欲セズト。是時
ニ當リテ。巖村侯閣老タリ。用捨窮通。ナ其手ニ出ヅ。而シ

テ春臺が言。一モ忌憚スル所無シ。是ニ於テ其臣屬相議シ
テ曰ク。無禮渠レ自ラ言フナリ。世固ヨリ儒者多シ。請フ更
ニ他人ヲ招カント。世子之ヲ聞テ曰ク。我過テリ。教ヘテ師
ニ受ク。何ヲ狹ムコトカアランヤト。乃チ禮ヲ厚フシテ之
ニ事フ。春臺後チニ六経略説ヲ著シ。コレヲ世子ニ進ムト
イフ。春臺善ク笛ヲ吹ク。時ニ輪王寺法親王音律ヲ好ム。春
臺ガ音ニ妙ナルヲ聞キ。嘗テ使ヲシテ之ヲ召サシム。春臺
辭シテ曰ク。余ハ儒生ナリ。儒ヲ以テ召サルレバ。則チ駕ヲ
俟タズ。其私嗜末技ヲ以テ。王門ノ伶人ト為ルハ。余欲セザ
ル。ナリト。此ヨリ終ニ復タ笛ヲ吹カズ。某侯春臺ニ餽ルニ
乾海參ヲ以テス。之ヲ調烹スレバ。則チ肉破レ味變セリ。春
臺怒ルコト甚シ。即チ人ヲシテ之ヲ却ケシメテ曰ク。余固

ヨリ鄙賤ニ論ナシ。而シテ君ガ交リヲ許ス所以ハ。其學ハ
所チ信ズレバナリ。既ニ之ヲ信ズル。豈ニ禮ナカル可ケン
ヤ。然ルニ餽ルニ腐敗物ヲ以テス。是禮ハ廢セルナリ。夫ハ
道ハ禮ヲ以テ主ト為ス。而シテ其既ニ之ヲ廢ス。亦何ヲ學
ブコトカ。之レ為サンヤ。今ヨリシテ後チ君ノ門ニ造ルコ
トヲ願ハズト。侯曰ク。是寡人ガ率爾ノ致ス所ナリト。即チ
自ラ書ヲ裁シ。更ニ一篋ノ海參ヲ餽テ之ヲ謝ス。侍中某。經
濟錄ヲ以テ進呈セント欲ス。書肆小林某ヲシテ。正本ヲ春
臺ニ求メシム。春臺辭スルニ。藁本字ヲ作クル慎マズ。且ツ
衰老シテ繕寫スルコト能ハザルヲ以テス。而シテ竊カニ
小林某ニ謂テ曰ク。侍中ニ托シ以テ言ヲ達スルハ。君子ノ
為サバル所ナリ。若シ命閣老ヨリ出レバ。則チ進メサルヲ

得ズ。^ト護園ノ徒。服元喬ノ宅ニ會ス。春臺獨リ後シテ至ル。
過テ板美中ノ佩刀ヲ蹈ム。義マサニ頂禮シテ以テ其過ヲ
ヲ謝スベシ。然ルニ春臺徑々ニ上帝ニ坐シ。知ラザルモノ
ノ如クス。美中性簡傲ニシテ。恒ニ春臺ガ動モスレバ苛禮
ヲ以テ已ヲ律スルニ苦ム。是ニ於テ故ラニ春臺ヲ目クバ
セシ。自ラ其刀ヲ執リ。已レガ額ニ加ヘテ之ヲ拜ス。春臺意
色殊ニ惡シカリキ。春臺疾ム。原尚賢脈ヲ診シテ曰ク。先生
遺言アラバ則チ之ヲ言ヘ。他日疾ヒ病ナルニ及ベバ言フ
コト意ノ如クナラザルナリト。春臺喜ムデ曰ク。子ハ誠ニ
世醫ノ起タザルヲ視テ。猶ホ面諛スルガゴトキニハ非ル
ナリト。即チ囑スルニ後事ヲ以テセリトイフ。
櫻所子曰。春臺一處士ナリ。然レドモ其道ヲ尊ビ其志ヲ高

尚ニスル。儒士中ニ於テ此ニ比儔スベキモノ鮮シ。志操女
此ナルヲ以テ。其師徂徠ニ於ケルモ。亦敢テ其步趨ニ從ハ
ザルモノアリ。人ヲ取ルニオヲ以テシ。德行ヲ以テセズ。故
ヲ以テ護園ノ徒。跼弛ノ士多シトイフ。徂徠先生ハ仁齋先
生ヲ奇ヲ好ムト謂フ。余ヨリ之ヲ觀レバ。徂徠ノ奇ヲ好ム
ハ仁齋ヨリ甚シトイフノ類ナリ。春臺ガ敢テ仕ヘザル。亦
仕途ヲ望マザルニハ非ズ。至竟善賁ヲ待テ沽ラント欲シ。
而シテ竟ニ沽レザリシナリトイフ。是其志ノ高尚ニシテ。
苟モ合マコトヲ求メザルニ由ル。夫ハ輪王寺法親王ノ吹
笛ヲ善クスルヲ聞テ。召サルレドモ往カズ。王門ノ伶人ト
ナルヲ欲セズトイヒ。閤老巖村侯ノ世子。已レヲ師トシテ
送迎セザルヲ見テ。余復タ敢テ見ルヲ欲セズトイフノ類。

ヲ為サズ、處士ヲ以テ生涯ヲ了ス。然レドモ其學問文章ト、識見氣節トハ、儒林ニ卓絶スル所アリ。春臺亦豪傑ノ士ト謂フベキナリ。今ノ歐學者流、自主自由ヲ説キ、不羈獨立ヲ談ズ。然レドモ權貴ノ門ヲ掃ヒ、塵ヲ望ムデ拜シ、其官員市場ニ向テ、沽ルコトヲ求ムルハ急ナル。善賈ヲ待ツニ遑ナキ輩多シ。春臺ニ及バサルコト遠シト謂フ可キナリ。

第二十一 横須賀侯忠尚正議ヲ持シタル事

横須賀侯西尾忠尚、隱岐守ニ任ズ。延享中、徳川八代將軍吉宗公職ヲ世子家重公ニ傳フ。是ヲ九代將軍トス。侯ガ人トナリ、小心慎密ニシテ、吉宗公ノ時若年寄タリ。其季年閣老トナル。家重公ノ薨ズハ先ダツ十月ニシテ卒ス。侯ノ幕

府ニ出入スルコト、前後二十七年未ダ嘗テ過タラス。身國家ノ大臣トシテ、樞軸ノ地位ニ在リトイヘドモ、敢テ濫リニ威權ヲ用ヒズ。盛岡侯嘗テ其留守居役ヲシテ方物ヲ貢獻セシム。閣老其使者ヲ見テ、親ク其貢ヲ受クルヲ以テ例トス。時ニ諸閣老政務アリ、奏者番ヲシテ之ヲ見セシム。留守居役曰ク、閣老ニ謁スルヲ得ズンバ、敢テ之ヲ獻ゼズ。監之ヲ叱スレドモ、留守居役固ク執テ可カズ。終ニ貢獻セズシテ退ク。監其不敬ナルヲ告ゲ、而シテ之ヲ罰センコトヲ請フ。諸閣老將サニ之ヲ聽ルサントス。侯曰ク、夫ノ留守居役ハ其君ノ為メニス、死ヲ畏レズシテ、之ヲ争フ、夫國ノ大鈞ヲ秉ル者ハ、マサニ民ヲシテ忠孝仁慈ナラシメントスルモ、ナリ、而シテ君ニ忠アル者ヲ罪セバ、何ヲ以テ

カ人臣タル者ニ危キヲ見テ命ヲ授クルコトヲ獎勵セシ
ヤ、今ヨリシテ後子、天下皆諂諛佞媚ヲ競ヒ、マサニ其主ニ
不忠ナラントス、然レバ則チ何ゾ之ヲ罪ニスベキモ、
ラシヤ、衆議即チ定マル、其正議ヲ持スル、概ネコノ類ナ
リ。

櫻所子曰、家重公ハ多病ニシテ政廳ヲ視ルコト必シ、故ヲ
以テ御側衆ナル者、稍威權ヲ得、然リト雖ドモ夫ノ漢唐ノ
宦者、其姦謀ヲ逞フスルガ如キ狀アルニ至ラズ、海内靜肅
タリシ所以人者、遠クハ烈祖家康公以來綱紀ノ未ダ弛解
セザルト、近クハ吉宗公ノ餘澤猶ホ存スルニ由ルモノナ
リト雖ドモ、抑モ亦閣老參政頗ル其人ヲ得タルニ由レリ、
館林侯松平武元右近將監ノ嚴毅方正ナル、佐倉侯堀田正亮ノ

英俊敏捷ナル、横須賀侯ノ小心慎密ナルト、相共ニ幕府ノ
政務ヲ參畫ス、是則チ四海靜寧ニシテ、民トモニ休息セ
シ所以ナリ。

第二十二 小林朝五郎豪壯ノ氣象アリシ事

小林朝五郎、一瓢ト號ス、松前侯ニ仕ス、松前ノ小吏タリ、軀
幹短小ニシテ、五尺ニ滿タズ、其人トナリ、廉潔、抗直、酒ヲ飲
ハコト一斗ニ過グ、然レドモ未ダ嘗テ人ト抗爭セズ、深ク
和、田義秀ノ人タルヲ慕ヒ、頗ル豪剛不屈ノ氣象アリ、嘗テ
藩宰某ニ從ヒ出デ、蝦夷海濱ノ事務ヲ司ドル、巡視怠ラ
ズ、事私シナシ、蝦夷ノ民大ニ之ヲ信ズ、居ルコト僅カニ三
年、政化遍ク行ハル、タマタマ花旗船アリ來テ、蝦夷海濱ニ
碇泊ス、藩宰事ニ從フ者ヲ遣ハシテ之ヲ檢セシメント欲

ス。衆ミナ相目シテ敢テ往クモノ無シ。一瓢憤然トシテ曰ク、咄、何者ゾ敢テ妄リニ我海灣ニ來ルヤト。直チニ小舟ニ掉シテ往ク。洋奴各銃槍ヲ手ニシ、船ニ入ルコトヲ許サズ。一瓢笑テ曰ク、汝輩敢テ妨グルコト勿レト。大聲船長ヲ呼ブ。船長聲ヲ聞テ馳セ至リ。一瓢ガ和顔恭禮ナルヲ見テ、引テ上床ニ致ス。一瓢從容トシテ曰ク、卿何ノ故ヲ以テ此ニ來ルヤト。船長背後ヲ顧ミテ、漁夫ヲ呼ビ之ヲ視セシメテ曰ク、此輩往年漂流シテ我國ニ到ル。其何ノ邦ノ人タルコトヲ審カニセズ。既ニシテ貴國ノ人タルヲ知レリ。因テ護送ス。請フ之ヲ受ケヨト。言未ダ畢ラサルニ漁夫一瓢ヲ見テ、赤子ノ慈母ニ逢フガ如ク、喜ビ極テ哭ス。一瓢モ亦覺エズ、感泣シテ袖ヲ濡シ、其厚誼ヲ謝シ、漁夫ヲ携テ去ル。實ニ

弘化三年某月ナリ。是ノ時ニアタリ、外交未ダ開ケズ、外人ヲ視ルコト仇讐帝ナラズ。苟モ一タビ之ト交接スルモノハ、罪重刑ニアタル。一瓢ガ事幕府ニ聞ユ、幕府急ニ藩主ヲノ藩宰某及ビ一瓢ヲ江戸ニ檻送ヒシム。則チ之ヲ評定所ニ繋ギ、幕吏ノ鞠訊スル至ラザル所ナシ。一瓢自若トシテ、少クモ隱匿スル所ナシ。且ツ曰ク、彼レ我ニ對スルニ厚誼ヲ以テス。我焉ゾ無禮ヲ彼レニ加フルヲ得ンヤト。幕吏復タ詰ルコト能ハズ。遂ニ藩宰某ヲ其邸ニ錮シ、一瓢ヲ流刑ニ處ス。一瓢孤島ニ在リ、日ニ酒ヲ飲ムテ興ヲ遣リ、復タ世事ヲ談ゼズ。倘佯自適ス。天氣晴朗ナルトキハ鯨魚ヲ射、群鮎ヲ網ミシ。雨雪ニハ則チ僮童ヲ招集シテ、書算ヲ授ケ以テ島ニ老死ストイフ。

櫻所子曰。初ノ外舶ノ我邦ニ來ルヤ。海内騷然タリ。憂憤慷慨ノ士ハ。概ネミナ攘夷鎖港ノ論ヲ主張シ。外人ヲ殺害シ。外人ノ館宅ヲ火ス。其意以為ク如此ナラズンバ。我が國威ヲ墜トスナリ。如此ナラザレバ。列聖在天ノ靈ヲ慰スベカラザルナリト。而シテ此等ノ暴舉アルガタメニ。反テ國難ヲ釀成スルコトヲ夫ノ一瓢ノ如キ身一小藩ノ小吏トシテ。其膽大ニシテ氣剛ナル。機ニ臨ミ變ニ應ジ。能ク彼我ノ交誼ヲ破ラズ。マタ我國威ヲ穢サズ。智略アルモノニアラズンバ。能クスベカラザルナリ。若シ一瓢ヲシテ今日ニ在ラシメバ。其國家ノ為メニ計度スル所。果シテ如何ゾヤ。外交大ニ開ケ。制度文物粲然トシテ觀ヲ改ムル。聖明ノ時ニ逢ハズ。孤島ニ流竄セラレ。以テ其身ヲ終フ。嗚呼亦不幸ナル哉。

第二十三 竹村悔齋才學ヲ以テ矜誇スルモノヲ面折ヒル事

竹村悔齋ハ。舉母侯ニ仕フ。家世。盤ヲ以テ業トス。結髮書生トナリテ江戸ニ來リ。佐藤一齋ニ從テ學ブ。頭角嶄然タリ。詩才尤モ警拔。一齋咨賞シテ期スルニ遠器ヲ以テス。而シテ跡弛不羈。窮スルコト甚シ。麹町ノ一老屋ヲ僦シ。硯田ニ依リ生活ヲ作ス。凝塵榻ニ堆クシテ。緝ニ儲粟ナシ。而シテ恤ヘザルナリ。資性剛直ニシテ。才學ヲ以テ自ラ矜誇スル者ヲ見レバ。必ズ其角ヲ折ク。面頸赤ヲ發スレドモ。顧ミズ。學者多クコレヲ畏避ス。語忠孝節義ノ事ニ及ベバ。必ズ泣ク。故ニ人亦之ヲ愛重ス。悔齋マタ林祭酒ニ從テ學ブ。其嗣

檀宇尚ホ少シ。尤モ悔齋ヲ愛重ス其門生ヲ會シ詩ヲ賦ス
ルゴトニ、悔齋ニ命ジテ牛耳ヲ執ラシム。篇成ル。輒チ相商
推シ、妥適ヲ得ザレバ措カズ。是ニ於テ益自ラ勵ミ、格カ大
ニ進ム。藩侯コレヲ聞キ、俸ヲ給シテ待講ト為ス。業ヲ受ク
ル者亦多シ。聲名藉々タリ。タマタマ一儒生アリ。近人ノ詩
ヲ選刺シ、以テ利ヲ牟ス。玉砥ヲ分タズ。財ヲ出スモノハ即
チ之ヲ收ム。名ケテ采風集ト曰フ。刻成ル。大ニ都人ヲ酒樓
ニ會ス。悔齋深ク之ヲ鄙ミ。長篇ヲ作ク。痛ク譏彈ヲ加フ。
齋シテ宴ニ赴キ。衆賓填溢ノ中ニ於テ、徐ロニコレヲ袖ヨ
リ出ス。座人傳觀シテ、皆色ヲ損ズ。恚テ譁スルモノアリ。悔
齋自若タリ。當時ノ耆宿山本北山、巨杯ヲ舉ゲテ之ヲ屬シ
テ曰ク、子ノ作絶ダ佳ナリ。然レドモ轄ヲ投ズル陳孟公ニ

アノズ。乃チ座ヲ罵ル。灌將軍ナリト。悔齋微笑シテ、巨杯ヲ
傾ケ、衣ヲ拂テ徑チニ出ヅ。一座大ニ驚ク。管茶山ハ關西ノ
老詩伯タリ。春川釣魚圖ヲ江戸ニ寄セテ、名流ノ題詠ヲ索
ム。悔齋ノ詩ニ云ク、

圭組從來不攪惜。一簑煙雨寄平生。翻持圖畫求題句。
猶恨釣魚是釣名。

語頗ル諷刺ヲ含ム。輕ク許サバルナリ。悔齋經術ヲ喜ビ、名
節ヲ砥礪ス。藩侯頗ル寵用ス。忠鯁ニシテ阿テズ。屢直言ヲ
以テ權臣ニ忤ヒ、擠セラハレシテ、觥々嶽々ハ氣以クモ挫
ケズ。行路難一篇ヲ賦シテ志ヲ見ハス。忠憤淋漓トシテ、長
歌、勸ニ過ク、夔刼ハ風骨アリ。年三十六ニシテ奇節ニ殉マ
悔齋頗ニシテ癯セ。眼ニ異光アリ。其詩初、韓蘇ヲ學ビ。晚

ニ黃陳ヲ喜ブ。毎ニ時人纖柔ノ風ヲ厭ヒ、獨リ勁健ヲ標ス。
縱橫排纂、奇趣空涌シ。自ラ一壇坫ヲ建ツ。柔筋脆骨、塗澤ヲ
假リ、以テ靡ヲ鬪ハス者ト。憂カニ異ナリシトイフ。

櫻所子曰。悔齋ガ詩ニ巧ミナル。嘗テ人ニ語テ曰ク。吾詩帝
ニ就キ題ヲ得レバ、先ヅ座人ノ營度スル所ヲ揣カリ、悉ク
之ヲ料機シテ、別ニ新意ヲ出ス。故ニ往々領下ノ珠ヲ獲タ
リ。然レトモ太ダ佳ナラザレバ、則チ太ダ惡シ、トイヘリ。
是一著ヲ先ニスルモノナリ。悔齋ガ詩才ノ警拔ナルハ、之
ヲ以テモ見ルニ足ルモノトス。而シテ資性剛直ニシテ、才
學ヲ以テ自ラ矜誇スル者ヲ見レバ、必ズ其高慢ノ鼻梁ヲ
折キ、面頸赤ヲ發スルニ至ルモ、顧ミサルニ至リテハ、固ヨ
リ尋常儒士ノ企及スベキ所ニアラズ。聞ク希臘ノ古賢索

克拉斯氏ハ、アリストートル、プラトノ師トシ尊ブ所而

コネース

シテ其主義トスル所ヲ畧言セバ、汝ダ自身ヲ知レトイフ
ノ一語ニ過ギズト、當持希臘ニ於テ、學問ノ隆昌ナル、才學
アル人ニ乏シカラズト雖ドモ、ミナ索氏ノタメニ其角ヲ
折カレ。其所謂才學ナル者ハ、未ダ以テ世ニ矜誇スルニ足
ラザルノミナラズ、却テ自ラ耻ヲ被ムルノ具トナルコト
ヲ知レリト。今悔齋ノ為ス所、固ヨリ歐洲ノ賢哲ニ比シ得
ベキニアラズト雖ドモ、剛直ニシテ能ク人ヲ面折シ、其才
學ヲ以テ人ニ驕ルノ戒ムベキヲ知ラシメタルハ、其言辭
ノ勁健ナル、銳鋒利刃ノ如キモノアリシコト必セリ。索氏
ハ其神ヲ説キタルコトノ、時俗ニ戾ルヲ以テ、遂ニ死刑ニ
處セラレ、悔齋亦屢直言ヲ以テ權臣ニ忤ヒ、遂ニ奇節ニ殉

スルニ至ル。索氏ハ古ヘノ賢者ナリ。悔齋ハ近世ノ一詩人
ノミ。然レドモ其為ス所、必ク似タル所アレバ、其末路亦大
ニ殊ナルナシ。是固ヨリ剛直ナル人ノ罪ニアラズ。社會ノ
罪ナリ。剛者折レ易ク、堅者摧クルコト多シ。而シテ其折レ
且ツ摧クルモノハ、風雪ガコレヲシテ然カラシムルナリ。
樹木ノ罪ニアラズ、人ノ剛直ニシテ社會ニ立ツ。此怒風惡
雪ニ逢ハザルコト難シ。何ゾ特リ悔齋ノミナランヤ。噫。

第二十四 尼鎌倉ガ郷人ニ語リタル事

尼鎌倉ハ阿龜ト稱ス。上總市原郡池和田村ノ農家ノ女ナ
リ。幼ニシテ父母ヲ喪シ、又兄弟ナシ。親戚ノ為メニ育セラ
ル。姿色婉麗慧ニシテ、剛ナリ。能ク理ニ屈ス。其長ズルニ及
ビ、親戚為メニ壻ヲ納レントス。阿龜堅ク之ヲ拒ム。曰ク、

妾ハ庸夫ヲ以テ夫トスルニ忍ビスト。親戚之ヲ強ユ。乃チ鎌
倉ナル比丘尼寺ニ投ジ。以テ之ヲ絶ツ。數年ヲ經テ郷ニ還
ル。人因テ鎌倉ト稱ス。非理ヲ以テ觸犯スル者アレバ、赫怒
シテ之ヲ拆クニ義ト理トヲ以テス。屈セズンバ舍テズ。恒
ニ刀ヲ帶ビ。自カラ女俠ト稱ス。郷里畏忌シ。目ヲ側テ、之
ヲ避ク。池和田村ニ古墟アリ。相傳フ里見氏ノ將某ノ居ル
所ナリ。北條氏ノタメニ陷レラルト。鎌倉ガ家ハ其墟ニ接
ス。而シテ幼キヨリ其事ヲ聞キ。後チ比丘尼寺ニ在リテ、野
史ヲ讀ムヲ聞キ。益里見氏ノ鬼祀ラザルヲ悲ミ。毎ニ泣テ
郷人ニ謂テ曰ク。州民誰カリ見公臣民ノ裔ニアラザラン
ヤ。其家亡滅シテ、三百餘年、一人ノ興復ヲ思フモノ無キハ
何ゾヤ。抑モ功ヲ國家ニ立テ、以テ其後チヲ立ルヲ請フ

ハ至テ難シ。然リト雖ドモ豈ニ其時機無シトセシヤ。不幸
ニシテ吾生レテ女タリ。然レドモ苟クモ時アリ機アラバ。
吾決シテ鬚ナキヲ以テ人ノ後ヘニ在ルモノニアラザル
ナリト。聞ク者笑テ以テ狂ト為ス。一日牛久驛ヲ過グ。タマ
タマ少年數輩。聚リテ酒ヲ飲ム。鎌倉ヲ招テ之ヲ飲マシム。
マサニ謝シテ去ラントス。一人滿ヲ舉ゲテ進メテ曰ク。阿
嬢善ク飲ム。請フ之ヲ飲メト。乃チ飲ム。其人手ヲ拍テ曰ク。
善ク吾杯ヲ飲ム。乃シ情アルナカラシヤト。鎌倉大ニ怒テ
曰ク。咄。奴輩ガ無禮ナル。汝ガ女俠鎌倉ヲ知ラザルカト。毛
髮竦立シ。目眦裂ク。少年畏怖シ。逡巡シテ罪ヲ謝ス。後チ屢
獄ヲ招キ。多方之ヲ誣ユレドモ。鎌倉理ニ據テ屈セズ。毎ニ
明哲ナルヲ得タリ。邑正歎苦シテ。竟ニコレヲ土室ニ幽ス。

タマタマ霖雨大ニ降り。水潦害ニ盈ツルニ由テ以テ溺死
ス。時二年四十左右ナリシトイフ。
櫻所子曰。鎌倉ハ一女子ノミ。然レドモ其為ス所。凡常ナラ
ザルモノナリ。駿馬ノ痴漢ヲ馱シテ走り。巧婦ノ拙夫ニ伴
テ眠ル。古人之ヲ以テ人世不平ノ事ト為ス。然ルニ鎌倉ハ。
親戚其壻ヲ納ル。ヲ強ユ。則チ其拙夫ニ伴テ眠ルヲ欲セ
ズ。去テ尼院ニ投ズ。其胸襟ノ洒々タル想フ可キナリ。夫ノ
佐野了伯ガ平語ヲ聽テ泣キ。馬場信房ガ三國志ヲ聞キ。北
條早雲ガ兵書ヲ講ゼシメタル等。此ハ是英雄豪傑ノ。一事
一語ニ感動スル。恰カモ夫ノ石勒ガ酈生六國。後チヲ立
ツベシトノ策ヲ漢王ニ獻ゼシトイフヲ聞キ。此策恐クハ
失セリトイヒ。張子房ガ之ヲ諫メテ云々トイフヲ聞キ。幸

ニ此事アリトイヒシ類ニシテ、亦深ク奇トスルニ足ラズ。
鎌倉ハ農家ノ女ニシテ、尼院ニ在テ野史ヲ讀ムヲ聞キ、且
ツ己レガ家ノ里見氏ノ將某ノ墟址ニ接スルヲ以テ、慨然
トシテ其後ヲ立テ、以テ報效スル所アラントス。而シテ當
時國家無事ニシテ、其事ノ至難ナルヲ知ルト雖トモ其特
機ヲ得テ為ス所アラントス。又其惡少年ノタメニ嘲諷セ
ラレントスルヤ、毛髮豎テ、眼眦裂ケ、一喝ノ下、數輩ノ惡少
ヲシテ、逡巡却退セシム。淮陰ガ胯下ヨリ出ルノ辱メヲ忍
ビタルニハ似ズ。思フニ近來、人情漸ク浮躁ニ赴キ、俯仰依
違シ、利ヲ見テ義ヲ忘レ、其甚シキハ恩ニ酬ユルニ難ヲ以
テシ、德ニ報ズルニ怨ミヲ以テス。苟クモ利ノ存シ名ノ在
ル所、一骨僅カニ投ジテ、萬犬之ヲ爭フカ如シ、タマタマ利

ヲ後チニシテ義ヲ先トスルモノアレバ、人目スルニ頑陋
ヲ以テス。社會ノ風潮、漸ク利ヲ射名ヲ繳スルヲ以テ賢ト
スルノ一點ニ傾斜スルヲ以テ、清廉剛直ノ節操アルモノ、
最モ駿馬ニシテ痴漢ヲ駄シ、巧婦ニシテ拙夫ニ伴フノ歎
アルヲ免ガレズ。目今萬國交通シ、外面ニハ親睦ヲ粧フト
雖トモ、内部ニハ各國互ヒニ罅隙ヲ窺ヒ、尊俎ノ間一タビ
異議ヲ生ズレバ、忽チ堅艦利砲ヲ以テ相見エントス。此時
ニ方リテハ、國民タル者、宜ク國家ニ報ズルノ志ヲ淬勵シ、
一旦外國ト緩急アルニ際セバ、各自國ノ為メニ其心カヲ
竭シ、敢テ身命ヲ顧ミザル。敵愾ノ氣象ヲ平日ニ養成セズ
ンバアルベカラズ。若シ當ニ利ヲ趨ヒ名ニ趨ルノミナラ
ンニハ、鎌倉ニ如カザルコト遠シ。豈ニ鬚アルヲ以テ、鬚無

キニタモ如カザル可ケンヤ。

第二十五 小林治助剛健ニシテ屈セザリシ事

小林治助。義徳ト名ク。江戸ノ人ナリ。父ハ忠義。權セト稱ス。皮革ヲ以テ業ト為ス。父ハ早ク歿ス。治助刻苦シテ自ラ立ツ。年二十餘ニシテ主家ノ擧ゲ用ウル所トナリ。書記ヨリ主管ニ進ム。主家ハ矢野氏ナリ。矢野氏ノ初メ撰津ヨリ移ルヤ。邑民十三家アリコレニ屬ス。後チ分レテ六十五家トナリ。各宅地ヲ占メ。以テ永業トナス。子孫衰敝スル。他戸ノ貨以テ之ニ代ルヲ許ス。此六十五戸ノ矢野氏ニ於ル。猶ホ國ニ世臣アルト一般ナリ。互ニ幹事トナリ。以テ諸列ノ非人ヲ統治ストイフ。治助ハ則チ其一ナリ。治助其職ニ在ルコト十一年。内外ヲ綜理シテ。整備ナラザルハナシ。矢野氏

喪ビ。養子年猶ホ少シ。治助其主母ニ請ヒ。遺言狀ヲ作クリ。以テ主家ノ憲則ヲ建テ。永ク之ヲ恪守セシム。為メニ誓約ヲ設ク。常陸ノ地燈心ヲ産ス。官其稅ヲ課賦シ。以テ公役ノ費用ニ充ルコトヲ許ルス。歲ヲ終ルノ久シキ財其用ヲ失シ。用度支フルコト能ハズ。治助之ヲ改革シ。公事ハ一二コレヲ草稅ニ資リ。以テ昔日ノ慣例ニ復ス。更ニ方ヲ設ケテ。關出以テ稅ヲ逃ガル。モノヲ禁ズ。而シテ稅額歲ニ増ス。之ヨリ前キハ。公役ハ六十五戸ノ者之ヲ給ス。治助建議シ。其肆店ヲ借ル者ヲシテ之ヲ助ケシメ。以テ其役ヲ緩フス。管内火ヲ失スレバ金ヲ管下ニ賦課シ。以テ其經營ニ供シ。并ニ田穀ヲ置キ。以テ賑恤ニ備ヘント欲ス。治助其職ヲ罷ムルニ遇テ果サズ。其他道路隄防ヲ修繕シ。産土神ヲ莊飾

スルガ若キ、皆執然トシテ序アリ。管戸ノ工場、距止ノ甚ダ
明較ナラサルアレバ、治助タメニ圖籍ヲ作ラシメ、以テ相
比合ス。區界明畫ニシテ詐偽ヲ容レズ。紛事亦ク熄ム。其税
ヲ納ル、コトヲ司ドルモノ。犯賊多シ。治助貧戸ノ税ヲ納
ル、アタハザルモノヲシテ、證券ヲ出サシム。收税者亦姦
ヲ逞フスルコトアタバス。而シテ賊ニ坐シテ刑ヲ被ルモ
ノ以シ、伊豆ノ非人、暴横ニシテ違犯スルモノアリ。村民之
ヲ匿ス。治助之ヲ告發シ、獲テ之ヲ罰ス。是ニヨリテ諸列ノ
非人、敢テ抗爭以テ命ヲ輕ムスルモノナシ。タマタマ江戸
ノ幹事タル者、事ヲ公役ニ藉リテ、管理ヲ脱センコトヲ圖
カリ、前キニ既ニ法衙ニ訴フ。後チ矢野民主ノ以年ナルヲ
時トシ、更ニ事ニ托シ、吏ト相結ムデ訟ヲ興ス。訟結ムデ年

維ドモ、ミナ怯弱ニシテ制シ易シ。獨リ治助ガ強剛不屈ナ
ルノミト。乃チ諷スルニ事ヲ以テシ、其ヲシテ職ヲ退カシ
ム。然レドモ治助亦素ヨリ計畫スル所アリ。此謀終ニ行ハ
レズ。治助ガ心ヲ主家ニ致セルヤ、其職ヲ罷メラレタルヲ
以テ、敢テ自ラ懈ラズ。而シテ之ニ代テ職ニ在ルモノ姦曲
ニシテ、主ノ遊蕩ヲ恣ニスルヲ視テ諫メズ。主遂ニ失行ヲ
以テ發セラレテ其家ニ歸ル。後嗣ノ至ルニ及ビ、復々之ヲ
導クニ尊貴自大ヲ以テス。以テ其耳目ヲ蔽ヒ、權ヲ已レニ
奪ヒ、而シテ私カニ異志ヲ懷ク。治助之ヲ憤テ未ダ發スル
ノ機會ヲ得ズ。タマタマ姦人治助ガ家事ヲ探リ、之ニ陷ル
ルニ法ヲ以テセントシ、人ヲ教唆シテ誣告セシム。治助乃

其妻子ニ命シ豫メ葬具ヲ備具セシメ相訣シテ出ヅ。獄
ニ在ルコト數月悉ク其姦ヲ摘發シ首從ニナ反坐セラル。
治助ハ職ヲ罷メテルヨリ九年ニシテ主家始メテ安シ。
治助ハ實義ヲ勇ムハ風アリ。常ニ書ヲ讀ムコトヲ好ム。其
主管ナルヤ專ラ學問ヲ勸ム。嘗テ子弟ヲ戒メテ曰ク。俗
人ハ學問ナキニ由レリ。學問ハ固ヨ
リ。家ヲ興スベシ。世人動モスレバ輒チ曰フ。
學問ハ産業ヲ治ムルニ妨ケアリト。是真ノ學問ニ非ルガ
故ナリ。又曰ク。利ヲ求ムルトキハ商估トナルベシ。利ヲ求
メ身命ヲ愛ム者ハ以テ仕フベカラズ。吾給料ノ外私ニ一
金ヲ貯フルモノアラバ其頭ヲ斷ツモ可ナリ。晩年家居シ
家道稍豐富ナリ。慶應三年其月年七十五ニシテ歿ス。

櫻所子曰。治助ハ清廉ニシテ剛直ナル。主家ノ為ニ其心カ
ヲ竭シ姦人ニ枕シテ屈セズ。遂ニ主家ヲシテ安寧ナラシ
ム。一木能ク傾厦ヲ支フ。以テ三尺ノ孤ヲ託スベク。以テ千
里ノ命ヲ寄スベキ者。其レ斯人ニ在ルカ。且ツ當時書ヲ讀
ム者多クハ生業ヲ治メズ。詩酒以テ日ヲ消シ。講說以テ年
ヲ送クルノミ。左レバタゞ文字章句ヲ攻メ。或ハ博洽記誦
ヲ貪リ。歟々トシテ議論ヲ逞フスルモ。未ダ嘗テ心上ニ向
テ工夫シ。聖賢ノ言行ヲ推究セザルモ。ハ恰カモ俳優ノ
忠貞ヲ扮スルガ如シ。治助ノ所謂真ノ學問ニアラサルナ
リ。是其産業ニ妨ゲアリト認メラル。所以ニアラスヤ。其
志操ノ壯烈ナル。其經濟ニ熟達セル。義ニ伏シ節ヲ立テ。危
ヲ扶ケ顛ヲ持ス。治助ノ為ス所ノ如キハ。儼然タル士大夫

ト雖ドモ、企及シ易スカラズ。而シテ舊幕府ノ時世、人間ニ
齒セラレザル者ノ中ニ於テ、斯人ヲ出スアリ。之ヲ學ブト
曰フ可キナリ。

第二十六 石合江村流俗ニ溺レズ風習ニ牽カレザリ
シ事

石合文蔵、江村ト號ス。始メ田口氏、宗家嗣ヲ絶ツ。石合氏ニ
改ム。江戸ノ人ナリ。人トナリ嚴毅ニシテ至性アリ。其父了
翁久ノ病ム。家道衰落ス。江村帷ヲ下ダシテ生徒ニ教授シ。
而シテ侍養ニ懈ラズ。盤藥、飢粥、廁、浴、澣濯、ミナ窮之ヲ親ラ
ス。其甘脆ヲ供セン。トスルニ資ナキヲ以テ、已レガ衣服器
什ヲ賣リ、以テ其費ヲ辦ズルニ至ル。隣並之ガタノニ感泣
ス。街吏官ニ告ゲテ、賞賜ヲ請フコトアラントス。江村固辭

シテ止ム。其師古畑王涵亦久ク病ミ。後チ明ヲ失ス。江村マ
タ侍養スルコト甚ダ勤ム。起臥飲食皆親カラ之ヲ扶持ス。
其始メ脩脯ヲ執リシヨリ。以テ實ヲ易フルヲ視ルニ至ル
マデ、二十年間一日ノ如クナリシトイフ。江村經學ニ邃カ
シ。而シテ詩文モ亦造詣スル所アリ。蓋シ文壇ニ在テ、別ニ
一大旗幟ヲ樹ツルモノナリ。唐津侯ノ世子タリシトキ、江
村ヲ延請シテ師トナシ、贈ルニ俸給ヲ以テス。江村深ク其
知遇ニ感シ。諸侯徵辟スレドモ皆就カズ。世子職ヲ襲ヒ次
子關老トナル。時ニ生麥ノ變アリ。英國ノ償金ヲ促ガスコ
ト大ニ急ナリ。江村建議スル所アリ。聽カズ。遂ニ名ヲ改メ、
テ默翁ト曰フ。之ヨリ前キ、藤森弘菴獄ニ繋カル。江村カメ
テ之ヲ救解シ。遂ニ危キヲ脱セリ。慶應丁卯、徳川内府政ヲ

朝廷ニ還ス。後チ江村ヲ召ス。即日程ニ上ボリ。十一月、内府
ニ二條城ニ謁ス。見ユル毎ニ人ヲ屏ケ、膝ヲ交エテ諮詢セ
ラル。然レドモ志ヲ得ズシテ去ル。慨然トシテ人ニ語テ曰
ク。曩キニ我ヲシテ鄺陸トナリ。公侯ノ間ニ往來シテ。諸英
豪ト交ハリ。以テ其心ヲ收攬セシメバ。則チ事未ダ知ルベ
カラザルナリト。又曰ハ。吾幕府ノ諸老臣ノ政ヲ為スヲ見
ルニ。絶テ乾ヲ旋、坤ヲ轉スルノ手段無シ。必ク紛擾ニ遇
フトキハ。輒チ狼狽シテ措ク所ヲ知ラズ。嗟呼何ノ世ノ人
材ニ乏シキヤト。其國ヲ憂フルニ深キ。其經綸ニ志アル。亦
以テ見ルベシ。明治六年一月病ムデ歿ス。年ヲ享クルコト
五十六。駒込龍光寺ニ葬ル。其子曰。江村德川氏ノ季年ニ生長シ。偷惰ノ風習ニ牽カ

レズ。奔競ノ流俗ニ溺ボレズ。其父ニ事フルニ孝。其師ニ事
フルニ敬。而シテ其友ノ獄ニ繫カル、ニ及ビ。カヲ竭シテ
之ヲ救解ルガ如キ。朋友ニ交ルニ信アルモノト謂フベ
シ。而シテ幕府ノ樞軸ニ當ル人ヲ評シテ。乾ヲ旋ラシ坤ヲ
轉ズルノ手段ナシ云々ノ語ヲ以テス。其滿腔ノ經綸蓋シ
大ニ為サント欲スル所ノモノアルガ如シ。左レバ貧富榮
辱ハ。未ダ以テ江村豪剛ノ志氣ヲ左右スルニ足ラズ。屹然
トシテ獨行自立。以テ自ラ其守ル所ヲ決ハズシテ。羈束ス
ルニ祿位ヲ以テスル能ハズ。江村ノ如キハ。儒士中ノ錚々
タルモノニシテ。毅然タル大丈夫ト謂フベシ。古人曰ク。忠
臣ヲ孝子ノ門ニ求ムト。今此語ヲ敷衍シテ。マサニ謂ハン
トス。師長ニ奉事シ。朋友ニ信義ヲ盡クシ。時俗ニ阿ラズ。其

志操ヲ持スル者亦宜クコレヲ孝子ノ門ニ求ムベシ。何ヲ
以テカ斯言ヲナスヤ。吾ハ則チ石合江村ニ於テ之ヲ見ル。

日本立志編卷之六終

明治十二年十一月十五日 版權免許
全 十五年三月廿四日 再板御届

著述者

福島縣平民

千河岸貫一

東京府下芝區烏森町
志番地寄留

大阪府平民

出板人

吉岡平助

府下東區備後町四丁目
三十七番地

全

發兌人

前川善兵衛

全 東區南久寶寺町
四丁目八番地

